



道  
本

號九第

卷參第

(行發日一圓一月每)行發日一月一十年九十三治明

可認物便郵種三第 日六十二月二十年一十三治明

# 求道第叢卷第九號目次

歎　　咏

左　千　夫　之

◎曉露光(長詩)

◎秋の歌(短歌)

◎信仰の質疑に答ふ

感　　謝

紹　　介

◎萬里相感　◎未見之友　◎恩賜　◎無爲自然

◎唯佛名あるのみ

◎陽明學新論　◎印度文明史　◎佛陀の聖訓　◎宗教と哲學　◎原始佛教史　◎修養錄　◎笑の國　◎喜劇七草

◎藻　屑(同)

志　都　兒

講　　話

時　　報

◎信仰は威力也

聖　傳

近角常觀

◎福島縣傳道　◎熊本市傳道　◎求道學舍第二第三印道會講話題

◎デヤークカ釋尊傳　眞實を保て

告　白

渡邊安治

講

毎日曜午前九時

第一　求道學舍

(本郷森川町一番地)

杉崎大愚

話

毎土曜午後二時

第二　求道學舍

(九段坂佛教俱樂部)

藤村三次

話

毎月二日午後六時

第三　求道學舍

(日本橋鶴瓶町説教所)

◎清らかなる一生

入信歡喜

近角常觀

講

毎日曜午後二時

第四　求道學舍

(本郷森川町一番地)

第六　求道學舍

(本郷森川町一番地)

第七　求道學舍

(本郷森川町一番地)

第八　求道學舍

(本郷森川町一番地)

第九　求道學舍

(本郷森川町一番地)

第十　求道學舍

(本郷森川町一番地)

第十一　求道學舍

(本郷森川町一番地)

第十二　求道學舍

(本郷森川町一番地)

第十三　求道學舍

(本郷森川町一番地)

第十四　求道學舍

(本郷森川町一番地)

第十五　求道學舍

(本郷森川町一番地)

第十六　求道學舍

(本郷森川町一番地)

第十七　求道學舍

(本郷森川町一番地)

第十八　求道學舍

(本郷森川町一番地)

第十九　求道學舍

(本郷森川町一番地)

第二十　求道學舍

(本郷森川町一番地)

第二十一　求道學舍

(本郷森川町一番地)

第二十二　求道學舍

(本郷森川町一番地)

第二十三　求道學舍

(本郷森川町一番地)

信仰の問題につきて心がけたまふ人々もあり。また手紙を以て胸中を打明けて尋ねたまふ人々もあり。又中央首都に學びたまへる人々のあらゆる境遇にありて安心を求めたまふ多きがなかに、いがなるものにや信仰につきて疑を抱かるゝ點多くは皆同一に出づるは不思議なるほどである。蓮如上人御一代聞書に何事も同じ様にきかで、聽かばかどをきかと申され候詮あるところをきかどなりとある、如何にも適切なる教訓である。今も皆の方々の尋ねらるゝ廉々につきて答をしてみよう。

人世の問題につきて煩悶する所劇しきゆゑ、信仰によりて其苦みを脱せんと思へど、いかにしても信仰出來ぬはいかゞのものにや、

がら、他の片手にて佛陀を拜みたてまつりてなどか一向専念と申すべし、名譽を拜み幸福を拜み、成功を拜みつゝ佛を拜むとは、いかにあさましき限りにあらずや。聖人の和讃に「佛號ひねと修すれども、現世をいのる行者をば、これも難修と

なつけてぞ、千中無一ときらはる」とあるは此處の急所を戒しめたま所なり。世は唯佛の御恵みのみと純一無雜なるを専修と云ふのである。一點でも、人生の幸福を念とする心の雜はらば、そは石の雜りたる飯と同様である。雜行である。されば蓮如上人も「もろくの雜行雜修自力の心修である。」されば蓮如上人も「もろくの雜行雜修自力の心をふりすて、一心に阿彌陀如來今度の一大事の後生御助け候へとたのみ奉りて候」とある。故に人生に煩悶したるの極人生を思ひ切りたると同時に眞實の信仰に入れるのである。世の煩悶悲觀の爲身を亡すのは人世が思ひ切れぬから彼の様になるのである。故に人生の煩悶を解くために信仰を求むるのではない。煩悶によりて人生の頼むべからざるを知り、唯佛陀の恵のみ頼むべきこととなる。夫が即ち信仰である。其信仰に入らば、己前に求め苦しみたる心か一轉して皆夢の如くなるのである。自ら求めざるに及びて何事も自ら到り、またたとひ如何にあるも中心満足せらるゝゆゑ、信仰の結果として自然法爾に人生の上に大安慰大幸福が来るのをある。現生十種の益は即是である。故に結局人生を思ひ切りて佛の御恵を仰ぐのが即ち信仰の眞髓である。

## 二

るのでない、明が来るがら闇が去るのである、人生を思ひ切るから佛の恵が見えるのではない、佛の御手に救はるゝゆえ何の苦もなく人生を思ひ切て所謂懸崖に手を放つことが出来るのである。機の深信と法の深信とは一體兩面である、親の恵みの極なきに感泣したる一念が嗚呼永々の人生申譯なき不孝者也と懺悔の涙の落つる一念である。全體煩悶しつゝある其人生の中に佛陀の御恵みの満ちつゝあるのを仰がぬから信仰に入られぬのである。罪惡を救へばこそ慈悲の佛である無常を離ればこそ常住の極樂である。既に此佛あり、此極樂あり、佛我を攝受したまひ、此極樂に生れしめたまふ。我は飽願を信ぜんには他の善も要にあらず念佛にまさるべし善なきゆへに、即ちもがきて物を擡まんとする心のなくなつた所である。惡をも恐る可らず、彌陀の本願をさまたぐ程の悪なきがゆゑに、即ち手を放つて地獄は必定すみかぞかしと人生を思ひ切られた所である。「煩惱具足の凡夫火宅の無常の世界はよろづのことみなもて、そらことたわことまことあることなきに、たゞ念佛のみぞまことにておはしますとこそ仰せは

我身は罪深し、人生は無常なりと、飽まで罪惡觀も無

常觀も極まりつゝあるも、猶信仰の起らざるは如何なるものにや、我久しき己前より人生の頼むべからざるを思ひ切りたるも猶煩悶を繰返すのみにて佛の御恵みを仰ぐあたはざるは如何、全體佛の御恵みの見ゆぬ人か人生を思ひ切れる筈なし、思ひ切つたとは言のみにて少しも思ひ切つて居らぬ、夫ゆゑ煩悶を繰返すなり。夫故罪深しと云ふも、人生無常といふも罪深きゆゑ如何にせん、人生無常なるゆゑ一刻も安んずべからずといへる煩悶狀態である、これは罪惡の自覺とか無常を悟つたとは決して言へぬ。抑々此の如く罪惡に苦み、無情に悲しみつゝある顯象は未だ眞の罪惡觀とか、無常觀とは名づけられぬ、眞の罪惡觀無常觀は我は罪惡なり世は無常なりといふ自覺である。即ち飽迄罪惡の塊無常の世界と思ひ切られたる心持でなけねばならぬ。此心持は佛の恵が見えぬ中は決して生ぜぬのである。度々いふが如くたとひ斷岸に身は全く落ちて、もう仕方がないと思ひながらも猶枯木や枯草や岩の角、蔓など手任せに攬みて煩悶するは我身を支へて呉れつゝある後の力に氣附かぬからである。聞が去りてから明が來

候ひしか」何よりも佛の御恵みに安んずるのが信樂開發の一点即ち我等の心に光明のさしこむ一點である。

## 三

私は少も佛の存在をも疑はず、佛の救濟をも疑はず、されど少しも歡喜の心起らず、慈悲の塊と口には言へど未だ少しも實感を生ぜず、何事も佛のなさしめたまふ所と思ふて辛棒して居れど、少しも歡びの心起らぬはいかにも物足らぬ心地す、こは如何のものにや、慈悲の塊とは佛陀は唯廣大極なき慈悲ばかりにて、何とも言ふてみようもなきゆゑ、其味を慈悲の塊と言ふたのである。少しも歡喜の念起らずして、佛の存在を疑はず、救濟を疑はぬと言ふてもそは頗る怪しむべき言ひ分である。佛陀の救濟は其救濟にあづかりてこそ疑はれぬやうになるのである、唯佛があると思ふて居る、救濟があると思ふて居る、何事も佛の爲さしめたまふ所と思ふて居る、思ふて居るのは信じて居るのではない。西有穗山師の所に或求道者が參りて、天地宇宙は我と一體也と思ふて居りますと述べたるに、思ふて居るだけわるいと申されたと聞きました。思ふて居るのは心で作りて居るのである、自分の心で作りた佛であるゆゑに歡喜の念が

ても報すべし、師主知識の恩徳も、ほねをくださても謝すべし。

「彌陀五劫思惟の御苦勞は即ち聖人が粉骨搾身の御苦勞とするのである。現に救ふて下さる呼聲があるのである、阿彌陀佛は其佛陀である、名號は其呼聲である、而も其佛其呼聲が我々と遠く隔つて居るのではない、我々の如き罪深き苦多きものを救はんとの呼聲である。此の如き慈悲をきかば、我々は信せずには居られぬ、歡喜には居られぬのである。我々は理窟や道理で佛の救濟を認めるのではない、竟畢救濟は佛の本願不思議を信する一つである、しかも其不思議を不思議と信する上は何のはからひもなくなるのである。親鸞聖人が

「彌陀の五劫思惟の願をよく案すれば、ひとへに親鸞一人がためなりけり、さればそこばくの業を持ちける身にてありけるをたすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよ」との御述懐は實に聖人が歡喜の極點を言ひ顯はせる御言である。蓋し聖人九十年の生涯少しも艱難辛苦とも思はずして傳道したまひしも、此信念一つである。殊に此御述懐は常に仰せられし御言なるべけれど、彼の日野左衛門の門前にて寒風凜烈の夜、石を枕とし、雪の中に眠りつゝ御恩を喜びたまひし時の感謝の言である。如來大悲の恩徳は、身を粉にし

りけるをたすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよ」との御述懐は實に聖人が歡喜の極點を言ひ顯はせる御言である。蓋し聖人九十年の生涯少しも艱難辛苦とも思はずして傳道したまひしも、此信念一つである。殊に此御述懐は常に仰せられし御言なるべけれど、彼の日野左衛門の門前にて寒風凜烈の夜、石を枕とし、雪の中に眠りつゝ御恩を喜びたまひし時の感謝の言である。如來大悲の恩徳は、身を粉にし

## 感

## 謝

### 萬里相感

盡十方無碍の光明は四海同信の兄弟を一慈悲海中に導きたまひて齊しく如來の御心に攝めたまふ。されば同じく如來の慈懷に攝取せられたんものは萬里も比隣の如く、天涯も對坐するに似たり。殊に吾人をして最も不可思議の感に堪へざらしむるは知らず識らずの間に一雑誌を以て其聞かんと欲する所を聞き、其豫想する所を満足せしむるに在り。蓋し我之を耳にすること慶也。我之を東北の同朋に聞き、亦之を九州の同朋に聞く。蓋し是れ冥々の間に廣大無碍の御導きあるに由らずんばあらず。是怪しみが如くにして決して怪しみに足らず。何んとなれば信仰は直ちに是れ佛心にして盡十方の無碍の光に連るものなれば也。四天下仰ぐ所は同じく是れ日輪の光明、萬里仰ぐ所は同じく是れ大悲の光明。吾人の胸中を照したまふ光明はやがて四海同朋の信界を照したまふ光明也。吾人此光明を嘆美するの聲萬里相通する所以のものは是れ私に

非ず、全く盡十方無碍光の餘徳たらずんばあらず。嗚呼。

### 未見之友

世に未見の友にして既に數年の友と稱せらるゝあり、是れ唯如來の慈懷に抱かれて同じく光明の中に棲む身なれば也。嗚呼吾人迷妄久しう大慈の御手に負きて三途の黒闇にさまよふ。忽ち慈親の恵みによりて遂に攝取の懷に抱かる、眞に是れ長者の窮子の本國に歸り來れるもの。難縛辛苦四十餘年遂に慈父の膝下に到る。到れば則ち兄弟相會し、同朋相語る、初めて知る共に是如來の愛子なることを、初めて知る、我に未知の兄弟ありしこと。而して此の如く兄弟面晤し共に慈恩を喜ぶ所以のもの畢竟是れ大慈親の難縛辛苦の恩寵たらずんばあらず。嗚呼吾人如來の慈顏に接し、信仰の親友に交る所以のもの偏へに如來永劫の念力によらずんばあらず。若し吾人安養の彼岸に到らば此の如き三世十方の兄弟相會して大慈法王の膝下に團欝して久遠劫來の恩徳を感謝せん、このときの歡喜如何ならむ。般舟讚に曰く、彌陀諸の佛子に告げ

て曰はく、極樂彼の三界に何如ぞやと。新往化生のもの俱に報ひんと欲して合掌悲咽して言ふ能はず。娑婆長劫の苦を免ることを得、今日見佛することは釋迦の恩なりと。

恩賜

机前枯坐坐ろに大悲の洪恩を感謝して暗涙頤に交る。忽ちに  
して同朋遙かに林檎を贈らるゝあり。紅頬纏々益に堆し、鳴  
呼眞に是れ大悲の恩賜、信念の凝結也。吾人常に此の如き恩賜  
に接する毎に無上の感謝の念を以て満たされずんばあらず。  
我が讚仰する所唯佛陀の大慈のみ同朋の慶喜したまふ所亦佛陀  
の大悲のみ。我物とては何物もなく、他の喜びたまふも直  
に如來の御催なり、其如來を喜びだまふ心より如來を仰く我  
に贈りたまふ。若し如來の大慈大悲なかりせば吾人意識上の  
連絡だになし、况んや吾人無意識の間冥々の裏に大悲の御手  
を運ばせたまふに於てをや。眞に是れ真心の贈物也、圓熟せ  
る信念の結果也、充實せる大悲の恩賜也。あはれ大悲恩寵の  
我身をとりまきたまふことの極なき、辱也。

唯佛名あるのみ

義なきを義とすとは法然聖人の言にして親鸞聖人か晩年讚仰して措かざりし所。行者はからひをなくして如來の御はからひにまかせたてまつる、之を稱して誓願不思議といひ、また名號不思議といふ。唯不思議と信じつる上はとかくの御計ひあるべからず、これ佛を證して南無不可思議光如來と稱したてまつる所以也。かくの如く如來の御はからひは一切有碍の我等がはからひを消したまふ、是れ無碍光の徳にあらずや。この光十方世界に遍滿しなまへる故に佛を讀じて歸命盡十方無碍光如來と稱したてまつる。聖人は晩年二門偈に於て此等の佛名を綜合して歸命盡十方不可思議光如來と讀じたまふ。是何れも皆南無阿彌陀佛の意なり。嗚呼我等か信心も南無阿彌陀佛、感謝の聲も南無阿彌陀佛、日常生活も南無阿彌陀佛也。蓮如上人曰く彌陀をたのめるひとは南無阿彌陀佛に身をはまるめたる事なりと、又衣のえりを御たゝきありて南無阿彌陀佛よと、又御たゞみをたゞかれ南無阿彌陀佛にもたれたるよし仰せられ候ひと云々。

卷之三

《求道學舍日曜講話》

信は威力也

今日の題は「信は威力也」と致しました。既に題にて顯はるゝ如く、一の信仰は人生の力である、威ある力であるといふ意味であります。

之は名高き故清澤先生も既に「信するは力なり」と申されまして、凡そ此の世に於て眞に人を信じ、眞に物を信する事程偉大なる力は無い。人生上眞の力とは唯「信する事」一つである、何事に就きても自ら信ぜざる者は最も弱い、自ら信ぜずして爲し、自ら信ぜずして行ふ者はいつ何時仆れるかも知れぬ。人生信仰が根本である、世を恐れたり、人に氣兼を爲たり、或は人生が危ぶ無い等と思ふのは、根本に於て信じて居無いからである。人生を信せよ、人を信せよ、人は決して自分を害しない、社會は決して我を悪しくはせぬ、我自身が人生を疑ひ人を信ぜざる故に安心が來無いのである。否たとへ我を害するものすらも先づ之を信じて懸る可きである、信するは力なり、信すれば如何なる者ても禍を轉じて幸ひと爲す事が出來る、人生は信仰が根本である、といふ事を先生は頻りに申されました。之はいかにも力強き御教訓で、人生

世に人爲を以て開墾せるほど醜きものはなし、無爲にして  
結びなせるほど貴きはあらじ。我等か信仰も亦然り、自ら作  
り固めたるほど危きはなし、唯々無爲自然にして如來より授  
けたまふほど圓滿眞實のものはあらじ。かく言へばとて手を  
拱きて下るを待てといふにはあらず、自力の益なきに氣附き  
て全く大悲を仰ぐときに知らず識らずの間に如來の御心を向  
けたまふなり。親鸞聖人一世の傳道は自然法爾を以て其極と  
す。信心の來るも自然なり、念佛の申さるゝも自然なり、現  
世の恩寵も自然也、來世の證果も自然なり、證卷に善導の疏  
を引きて曰く。西方寂靜無爲の樂は。畢竟逍遙として有無を  
離れたり。大悲心に薰して法界に遊ぶ。分身して物を利する  
こと等くして異なることなし。或は神通を現じて法を説き、或  
は相好を現じて無餘に入る。變現の莊嚴意に隨て出づ。群生  
見る者罪皆除る。又贊して曰く歸去來魔鄉には停るべからず  
曠劫よりこのかた六道に流轉して盡く皆逕たり。到る處餘の  
樂なし。唯愁歎の聲のみを聞く。此生平を畢へて後。彼涅槃の  
城に入らんと。

は正に此の外ありませぬ。而して先生は猶ほ此上に言葉を加へて、信するとは佛陀の御力を絶対に信するのである、佛陀は決して我に悪しくは爲給はぬ、決して我を御見捨なさら無い、絶対の佛陀を信せよ、然らば我々は絶対の力を得る事が出来るのである、といふ事を懇々と諭されてあります。問題は實に茲にある、今日私の御話する所も此の問題に就てあります。

今清澤先生の御教訓の通りで、信するは力、實に絶対の力であります。處で其絶対の力を信するといふ其有様は何うであるか、此の點より私は話さうと思ひます。第一に我々が生活する上に於て、信するは如何にも力である、我々は此の信する事一つが出来ぬによりて色々と苦しみ、煩悶を重ねて居るのであります。處が我々は既に「信するは力なり」といふ教訓を受けながらも猶ほ其の境に到る事が出来ぬのである。之は何故出来ぬか、則ち自分が信せねばならぬ、自分が到らねばならぬと、自分の上に力を以て信せんと爲るが故に出来ぬのであります。社會を信じ、人を信じ、敵を信じ、自己を信じ、信じ畢れば實に絶対の威力を得る事は確かにあるも、自分が信せねばならぬとなると到底信する事は出来ぬのであります。

今日多くの人が信仰問題で苦しめるのも大方は皆此點で、例へば先方が我を恨んで居るとするも、此方が先方を信じし蓋す時は先方を同化することが出来る、と迄は誰でも知つて居るのである、が其の根本の信が如何しても出て來無い、之は如何と云ふに、即ち今申す如く、自分が信せねばなりません。

か無いのである。自分の踏む力の爲で無く、据はれる地盤が確かなる故に安心して其上に居られるのであります。擺むと言ふも我が擺む心持に力を入れるので無い、譬へば茲に立派なる玉があるとする。我々が之を離し捨てんとするも離す事が出來ぬ、何故出來ぬかといふに即ち離し捨つる事能はざる程に玉の力が確かなる故である。地盤を踏むと云ふも自分の力で踏むのでは無い、全身を據りかける可き地盤が確かなる故に、即ち牽きつける玉の力が大なる故に、玉に引かれ地盤に引かれて、我々は寧ろ其處を去らんとするも去り能はぬのである。是が眞の信じた有様であります。故に信するといつても信せねばならぬと自分で務めるのでは無い、人を信せねばならぬ人生を信せねばならぬと言ふ處が、本來信す可らざる人生、信す可らざる社會、淺間しき我等人間同士、之を信せんとするも固より不可能である。然らば何を信するのであるか、何に安んずるのであるか、即ち佛陀に安んじ、佛陀を信するにあるのです。信するとは即ち佛を信すのであります。

又人は言ふかも知れぬ、「夫は解つて居る、併しながら我々は其佛陀を信する事が出來ぬのである」と。如何にも最なる言であります。去りながらう曰ふ人は口では佛陀と言つて居るもの、實は全く佛陀が解つて居無いのである。抑も我々が信する佛陀とは何であるか、即ち親鸞聖人が『行卷』に於て示されたる南無阿彌陀佛の名號、南無阿彌陀佛の恵みが之である、我々は之を信せさせて貰ふのである。聖人が『信卷』の前に『行卷』を置かれたも此の佛陀を知らしむるためである、

らぬと思て居るからである、此心のある間は到底安心は出来ませぬ。

抑も信とは即ち確信で、人が自己の足場を固く踏み締め、動かず離さぬ事です。阿彌陀經の中には

若し善男子善女人ありて、阿彌陀佛を説くを聞きて名號を執持する事若是一日若是二日若是三日若是四日若是五日若是六日若是七日一心にして亂れず

とあります。而して親鸞聖人は此執持の語を解して

言は不散不失に名く

と仰せられた。即ち自己の立脚地を固く踏み締めて移轉せず手は堅く握つて散せしめず失せしめず、これです。けれども我々は斯く聞く時は直に自分で踏みしめなければならぬと思ひ、自分で握らなければならぬと力む、故に信する事が出来ぬのである。つまり自分が信するといふ方に計り力が行き、踏みしめる可き地盤、握るべき物柄が不確かなる故です。早い話が一家の中に於て、斯くせねばならぬ、人の惡を思つてはならぬと力んでも、思うてならぬ扱と思うて居るのは既に駄目なのである。つまり踏む可き地盤が無いのに踏まねばならぬと、空に悶えて居るのであります。

然らば我々は如何にして信する事が出来るかと言ふに、茲が要點であります。踏みしめると謂ふも我々が自己の足にて握る事では無く、握ると謂ふも我々が自己の手にて握る事では無く。踏むべき地盤夫自身、握る可き物柄夫れ自身が確かなる故に我々は自分の力を用ひずして安じて其處に動

先づ人生に斯る慈悲かる恵みの存在を知せて下されたものであります。善導大師は宣はく

利効は即ちこれ彌陀號なり、一聲稱念するに罪皆なぞ  
こる云々

と。斯の如き偉大なる佛の御力をば即ち南無阿彌陀佛と顯はされたのです。併て此の廣大なる御力御恵みが解つて見れば、最早や信するも信せられぬも無い。今迄は此の御力御恵みを知らずに、唯信せねばならぬと言つて居つた故いけなかつたのである。或は任かせよとあるから任かさねばならぬと力み、或は任かせて仕舞へば「やりつけなし」になるかと怪しまる之等は皆此の力強き佛陀が見え無じから起る計ひです。然るに今はさうでは無い、廣大の佛の御力の地盤が今現に茲に有るのである。此の佛の御力を見れば、我々は手を引つ込めやうと思ふても引込める譯に行かぬ、此の地盤の與へられたるを見ては安心するなどあつても安心せざるを得ぬのであります。夫故に信すると云ふも自分から進みて信するのでは無い、信するは誠に力であるが、自分で佛を信する氣で居る間は信する事は出來ぬのです。夫が何うして信せられるか、今言ふ如くて、現に佛陀は廣大の御力を以て我々に向うて居て下さるのである、力は我に有るにあらずして佛陀の方にあります。故に信するは力であるが、此力は自分が信じた自分が摆んだと力む力では無い、其佛の偉大なる御力を信せさせて貰ふのであるから、信するは力なりと申すのです。親鸞聖人

は「他力といふは如來の本願力なり」と示されました、此であります。自分の力は少しもない、全然佛陀本願の御力の上に安住させて貰ふのであるから他力であります。

何よりも此眞宗結聖仙力の辭へは外からい難い。見えて誤解して居る人が多いやうです。例へば廣大の御慈悲に任かて

據る可き方が見出せぬ故佛の方に投げ遣りて失望落膽する事である、仆れると任かすと云ふのである、任せば力抜けがするのであると、斯ふ云ふ風に考へて居る人があるやうです。無論今日茲にお出の方には左様の人は一人も有りませぬが、猪之何うかと云ふに、第一佛陀の御慈悲を味はずして他力の解る筈は無いのです。然に唯漫然他力とは自力の無い者が無暗に投げ遣りに爲る事である杯と思ひて居るのは他力の味が分らぬからであります。今申す如く他力とは如來の本願力である、凡夫相對の小見を離れて唯一絶對の大御力に歸する事であります。忌憚なく言へば寧ろ今迄の自力こそ怪しい、人間五十年、限りある生命限りある力を以て自ら力みて此大事を明らめやうとする、古聖賢はいざ知らず、今日の我等には全然不可能の話であります。然に茲に他力の一端が有つて、他力といふは如來の本願力なりと承はるのである、我等に取て此程の歎びは有りませぬ。故に他力に據ると曰ふは、唯二絶對力、如來の本願力を信ずる事であります。

した。私は昨夜は特に信仰の活動的方面、即ち人生の方面に  
信仰の顯はれる事をお話致し、其一例として信州飯山なる

る、此の名入れは此限りに止めては何うかといふ事を話された。すると親の申さるゝには其様に云ふた處で仕方が無い、自分としては此で力限り充分の物を作つて置くのである。之を買はぬは寧ろ買はぬ人が悪いのである、例へ人が買はぬからとて今更悪い品物を賣る事は出來ぬ云々」と、猶ほどんどん續けて行かれた。斯く爲る事丁度三年の間、三年目の終から四年目の初へかけて漸々に少しづゝ賣れる様になつた。すると忽ちの間に道具屋の名入れの評判は近邊に鳴り渡つて、三年の積荷は目たく中に賣り切れ、其後は如何程でも仕入れゝば仕入れる丈け賣れ行くといふ大盛運を見るに至つた。夫からは他の呉服店でも名入れに爲無いと賣れぬといふ有様になり、皆名入れになつた相であります。此は私この夏飯山に参りました節、御縁有つて道具屋に泊めて貰ひまして直接主人より承はつた話であります。

其處で一つ私しの注意して置き度いと思ふのは、凡そ我國今日の商業家は、商業は信用が大切である、人の利益を考へなければ人が買はぬ、着實が肝要である、と迄は普通に解つて居るのである。で自分が善き物作れば人は買ふ可き者、人の爲めを計れば必ず賣れる者、自己の品物を信じ社會を信じて商業をやる、といふ點迄は一般に行けるのです。僭て彌々其通りに試みた結果、一も賣れぬ、之では損だ、此んな事爲て居ては馬鹿らしい、となつて、猶ほ其處に辛棒する事が出来るか何うか。彌々といふ最後に迫つて誰一人省みぬ様になり、こんな馬鹿々々しい事は叶はぬ」となつた時に、猶ほ一步を進める事が出来るか何うか、茲であります。言ひ換ふれ

ば茲迄は常識て行けるが、此上は唯常識丈では到底行くことが出來ぬのです。今の幸吉氏は、彌々賣れぬ、人が顧みぬ、見込が無いとなつて、其つまらぬ仕事を如何して進められたか。如何に人が買はぬにしても、よし人が馬鹿と云ふとも自分としては此外に仕方が無い、佛を喜ぶ上に於て設へ何とあつても不爲の者を安く賣りつくる事は出來ぬ、不信の品物を賣つては佛に對して申譯が無い、設へ何程の損を受けても自分としては此外に道が無い」と。たつた一言なれども信仰が無くしては決して言ふことは出來ませぬ。斯く幸吉氏が一步を進める事が出來たと云ふものは、全く佛の御力を信じて能く利害の外に立つて居るからであります。處が茲が大事の所で、若し佛の御力をば、佛の御力によつて居れば後になりて大利益をうる事である杯と思ふたらば實に飛んでもなき間違である、夫では目的は利益成功に有つて佛は其目的を達する迄の手段に過ぎぬ。若し成功しなかつたらば、忽ち倒れてしまふ。信仰といふのは成功する爲の手段でなくして、實に此一道より他に道はないから結果はどうなるかわからぬけれども、其一道を行かなければならぬのである。これが人生上に信仰が活躍して來る有様であります。都合よく行ける間なら信仰なくしても誰れでも行ける、然し、愈と極まつて今一步となる瀬戸際には、信仰に非ずしては行けぬ。如何に損をしても仕方がない、此一道が我行くべき道であると、チャン踏みこたへる事の出來たのは、則ち佛の力で知らず識らず踏

道具屋といふ吳服店が信仰の力で榮えたといふ事實を申した次第でありました。此は茲に御集の諸君は既に御存知かも知れませぬが今一度簡単に話し度いと思ひます。信州飯山地方に於きました或時の事吳服を賣るに、吳服の藍が年々に悪くなつてとても仕方が無い。其處で今申す道具屋の主人山本幸吉といふ人——今の主人は此人の息子で矢張り幸吉と云ひます。此先代の幸吉氏が態々出産元の尾張の方へ是非に從來の善い藍を用ひて貰ひ度いと頼まれた。處が當時は唯、見えの善い安物の流行るので、何と言つても西洋藍を用ひたやす物しか出來無い。仕方が無いから幸吉氏は見込を以て尾張對馬の或る一軒の店に頼み込んで、全く自分の云ふ通りに、反物の藍色も長も目方も何もかも充分確かな物が出來れば、其一軒の產額は何程でも自分一人で引受けれるといふ事に特約せられたのです。斯く世間一般安物の行はれる時に於て、何故に氏は獨りかかる苦心をせられたかと云ふに、何うしても今迄の吳服にては客の利益にならぬ。客から此藍は落ちぬかと聞かれ、落ちませぬとは何うあつても自分には言ふ事が出來ぬからであります、そうして望通りに出來揚つた反物には織口の處に道具屋といふ名前を入れ込んで、之を「名入れ」と云ふのです。儲て其結果は如何と見て居るに、何分にも實質が確かである丈けに體裁が悪くて價が高いのであるから、誰も一人も買ふ者が無い。終に最初の一年は全く賣れずに居つた。二年目になつても少しも賣れ無い。二年目の終になつて息子は最早や見て居るに耐られぬ、幸吉氏に曰はるゝには、「此では到底店が立ち行かぬ、もう此の名入れには、こりぐんであ

みこたへざるを得ない。何を地盤にし進めたか、佛が地盤となりて進めたのである。若信仰のないものならば、或點迄は困難に堪へることは出来様が、愈見込がなくなつた時は自分の確信を守る能はずして、世間に從はねばならぬと諦めてしまふ、それでは駄目です。こゝが要點である。其一步を進むる力は自然に佛力の現はれ来るがたである。是は一の例である。總ての事皆然り、信仰は力むで踏みこたへるにあらず、徒らにかくすのであると頑張るに非ず、後にはキツト利益があるだらうと目先をきかすのでもない、又忍耐する自分の力でもない。先は如何なるかはしらぬど如何しても動く事の出来ぬのが信仰の力であります。即ち佛の御慈悲を喜ぶ身である故に虚言を言ふてはならぬと力こぶしを入れるのではない、自然に虚言が云へぬのです。されば後に商品が皆賣れる様になつたのは自然の然らしむる處であります、即ち佛力の自然にあらはれて賣れたのであります。故に一步を進める事の出来るのはたゞでは行けぬ、唯人間の計らひが自分から捨てたりて如來の御計らひに任せつゝある間に如何なる困難にも打勝てるのである。所謂他力とは如來の本願力であります。

諸如何にして佛を信ずることが出来るかと苦しむて、信仰を得度々として信ぜられぬのは、結局佛の御力を無視して、たゞ己の握む力をのみ見て居るからです、それでは佛が分つて居ないのである。抑も佛とは如何なる方か、此方が握むのか、又佛が我を擡ひ下さるのか。佛とは我々が力なく人生に日夜苦んで居るのを御覽じて、其苦惱の我等を助けずには居られぬといふ廣大の慈悲力により、佛が趣んで下さるのである、

佛の本願力を觀すれば、まゝあふて空しく過ぐるものなし、能く速に功德の大寶海を満足せしむ。

實に此本願力にまゝあへば、空しく過ぐる者は一人もない。常に煩惱に狂はされて生死の巷にあくせくと往来し、五惡趣へ落ちる道六道にさまよふ路にせつせと急いでいる。處て一度佛にあひ奉れば如何に六道に落ちんとするとも佛は決してたゞでは通さぬ、たゞ何處へ行く、私は一寸ゆきます、否一寸ではない、これは六道へ落つる道であるぞよと、よく引とめて決して通さして下さらぬ、實に惡趣にねむくべき身なれども佛がやつて下さらぬのである。されば五道六道といへる惡趣に既に趣く可き道を願力の不思議として之を塞ぎ給ふ也。逃げ様としても佛は追ひつめて逃がし給はず、佛に逢へば必ず功德を與へずにたゞではなかぬ。此佛の御慈悲を聞けば誰が信せず、喜ばずに居られよう。此廣大の威神力に逢へば信せざらんとするも信せずに居られぬのです。我々が阿彌陀佛を信するといふも言葉がれそい、阿彌陀佛があればこそ信せすには置かれぬ様になるのです。其廣大なる佛の惠を一度きいて、何といふ理屈はなけれども「あゝありがたい」とよろこばせて貰ふのです。其ありがたいとは何故あらがたいかはわからぬども、たゞ五劫思惟、非載永劫の御苦勞がありがたい。

親鸞聖人曰く

衆生佛願の生起本末を聞いて疑心ある事なし、是を聞くといふ

佛が恵んで下さるのである。救ふ力は佛の方にあるのである。されば信するといふも我々が信するのではない、詮するところ佛の慈悲力に催されて信ぜずには居られぬのである。我等罪重く障多き者を佛より眺めて本願力を加へて下さる、其本願力あればこそ助からぬ身も、信を得さしてもらへるのである。或人が雲居寺の阿彌陀佛に攝取不捨とは如何なる事かと祈誓をかけて伺がはれたら、或夜夢に阿彌陀の今の人袖を捕へて、逃げ様とするけれども離したまはなかつた。不思議におもふて蓮如上人に伺がひましたら、攝取不捨とは逃ぐる者を捕へて逃がしたまはぬことであると仰せられた。

抑も佛の威神力とは如何。我々はかくの如く種々煩惱に眼がくらんで常に佛の御力より逃げまわつて居る、それを逃がさぬと大慈悲の御方便で追ひこめて、飽まで助けずにねかぬと恵を加へて下さる、其が佛陀の威神力である。其を信せんならんと力まずとも、佛の其御力にもたれ奉つる處で自然に信ぜずには居られぬのである。さりとてない處に佛を自ら作つてもたれるのではない、かくの如く昔より醉ひ眠れる者迷へる者に對し、久遠劫より倦まず撓まず今日今時に至るまで大慈悲を注いで下さるのに氣附かして戴ければ作つてもたれどもたれるのではない、即ち今信ぜずにはおられない。信じさせ、戴けば我等は如何なる態度で佛に向ひ奉るか、求めて得たところで決して云へぬ、向ふから求めて御慈悲に入れて下すつたのである、此大慈悲を今まで如何して氣附かなんぢらう。然るに佛の御力により今日眼前佛に會はせて頂いた事の嬉しさよと唯懺悔と感謝の他はない。天親菩薩のたまはく、

する事が出来事るかといふに、佛願の偉大なる事を聞いて疑心がないから信することが出来るのです。成程佛は有りがたい、无明長夜の燈炬である、生死大海の船筏である、頓極頓速に決定するのです。即ち我心に喜が満ちて下さるのである、ゆゑに至心に回向したまへりとあるのです。願成就の文にも、

其名號を聞きて信心歡喜し、乃至一念せん、至心に回向したまへり、

とありまして、佛の慈悲をきく、名號をきく、心の底より唯々難有いと歡喜の心の涌き出でたのが信樂開發の一念であります。この一念は即ち佛の力より起して下さつたのである、ゆゑに至心に回向したまへりとあるのです。

此方より求めるは大なる誤りであります、我はからひて佛を信せんとするなどは大間違です、それは寧ろ御慈悲より逃げて居るのである。しかし其逃げて居る間に佛の慈悲が徹して一

點針の先程でも心が開く時に極速に信樂開發して喜ばしていただくのです。此時が即ち往生を得るので、死ぬ時にはじめて往生するのではない、即ち即得往生であります。

前に申しました吳服屋の事でも、此如來の本願力を信ぜさせて貰ふたからである、其御力の故に疑ふ事が出來なくなつたのです。此信仰は自力で解るのでない、如來の加威威力によりて到らして貰ふのです。即ち聖人の仰せにも

然るに常沒の凡愚流轉の群生無上妙果の成じ難きには非ず、眞實の信樂獲ること難し、何を以ての故にいまし如來の加威威力によるがゆゑに、博く大悲廣惠の力によるが故に、遇淨信を獲ば是心顛倒せず、是心虛偽ならず、是を以て極

惡深重の衆生大慶喜心を得て諸の聖尊の重愛を獲る也。と。常沒流轉の我等決して無上妙果を成し難いのではない、たゞ信する事が出來ないのです。それに今信せざしていたゞいたといふのは、即ちいまし如來の加威力によるのである、大悲廣惠の力によるのである、あゝありがたいかな、貴きかな。現に此一念の信樂は如何して我々如き淺ましき心に起るものか、諸の聖尊の重愛を獲ればこそ信樂を開發して下さるのです。實に遇々淨信を得ば此心轉倒せず、此心虛假ならずと、實に流轉輪廻の迷ひの中に遇々得さしていたゞいたのであります。こゝを以て見ればよく分る、多くの人の信仰を得がたいのは此御廻向をよそにして居るからである。佛の方より下さるのを疑の網にからまれて居るからわからぬのである。それをいまし如來の加威力を以て疑網を斷ちてわからし下さるのです。親鸞聖人は加威力といふに左假名をつけて（ミダノチカラヲクワヘラル、）とあります、實に味のある御釋であります。即ち信仰を與へらるゝとは直ちに佛力を與へらるゝのです、故に我はたゞ如來の加威力を仰ぐべし。こゝになると一として佛よりの御廻向ならざるはなし、何ぞしらん、泣き悲しんだ出來事も是皆一として如來大悲の賜物ならざるはない。かくくなれば人世悉く佛の大慈大悲の現れであります。世に何て佛の御慈悲の他のものがあるものか、我等の眼を樂しませる紅葉黄菊のみならず、我を苦しめる者、皆すべて如來の御恩である。若此御慈悲をしらぬ前ならば此に抵抗して争つた事もあつたのだ、然るに今は其都度いよ／＼人生の願むべからざるを知ると共にいよ／＼如來の恩寵の深き

## 聖傳

### ジャーダ力釋尊傳

#### 第一 真實を保て

此御教は佛ジエタヴァナ僧院におはしゝ時五百の苦行者に諭したまひし所なり。

我等かく告げられき。アナータビンジカなる商人、一日五百の苦行者を引具して佛世尊に詣て奉れり、數多の花環、香物、香油、蜂蜜、糖蜜、衣服等を持ちてジエタヴァナにゆきぬ。佛世尊を恭しく禮し奉り、花環等を捧げ、弟子等にも亦薬物等を施し、禮を盡し從容として師の一方に坐を取りぬ。

他の苦行者等も亦是に遼じ、アナータビンジカに近く坐を取りぬ。彼等世尊の尊容を見奉るに満月の光麗はしきに似たり、佛の尊形は大小の隨好を廻施したまふ、一尋の輝き其身を廻り、後光あたりを射る。やがて若き獅子の岩上に威々しく吼ゆる如く、雷電天地に轟き渡るが如く、大音聲もて佛大法を宣下したまふに、天の川の衆星より眞珠の環を繰り出すが如くなりき。

彼等主の御教をきくしとき、心に大に歡喜し、立ちて世尊を頂禮し奉り、悉く邪信を翻して佛陀に歸依し奉りぬ、是を初めとして、彼等はアナータビンジカと共に僧院に行き、信

事を仰ぐのみであります。親鸞聖人は流罪の時何と仰せられたか、

若大師聖人流刑に處せられたまはずは、我また配所に趣かんや、若我配所に趣かずんば何によつてか邊鄙の群類を化せん、是なほ師教の恩致也。

と喜ばれた。人生の狂亂怒濤の間をは此佛陀を信するの一筋にて行かしていたゞけるのは、ひとへに如來の威神力の加護によるのです。さりながら此信仰を得たからとて自ら偽つてやさしい顔をするのではない、又反対に威張るものもない。剛柔宣きに従がひ我を離れて無礙自在に行かせてもらふのです。例をとれば真に自分をはなれて居る故、信する處は遠慮なくいへる。併し一念でも己の利益の心が雜れば、おもひ切つて云ふ事は出來ない。更に私心がなくなければ損得にかゝはらず何事でもさして下さいます。私のなき故に却て力強い事が出来るのです。眞實の正義といふは是れである。故に絶對に強い事も出來れば又充分やさしくする事も出来る。自分に私の心なければ、ポンとやめる事も出来る、何故出来るか、佛の御力で出来るのです。

佛の威神力を蒙ればかく縱横無盡に働くります。信仰生活の味は所謂る「大悲の願船に乗じて光明の廣海に浮びぬれば至徳の風靜かに衆禍の波轉ず」といふ有様です。此の意を又和讃に宣はく。

大願海の中には、智愚の波こそなかりけれ、弘誓の船にのりぬれば、大悲の風にまかせたり。

仰を告白して佛の教訓を受け奉るを慣とせり。

一時世尊はサバツチよりラージヤガハに行きたまへり。而るに彼等は世尊の地を去りたまひしとき、アナータビンジカ又此等の苦行者を伴なひて世尊に詣て奉れり、以前の如く施物を捧げ禮を盡して坐をとりぬ。世尊に申して曰さく「君ジエタヴァナを去りたまひしとき、アナータビンジカを此等の苦行者を伴なひて世尊に詣て奉れり、以前の状態に復しぬ。願はくは佛慈悲を垂れたまへ」と。

時に世尊、无量阿僧祇劫に於て絶えず語りならひたまひし愛語の力により、蓮花の口を開きたまひしに、恰かも天の香物もてにほはせし寶玉の箱を明けしが如くなりき。佛快く貴き音聲を發してのたまはく「我教徒は三寶を捨て、他の信仰に歸せり此事や如何に」と。彼等其を隠す能はずして「そはまことなり佛陀よ」と答へ奉れり。佛曰く「上、天上より下、地獄に至るまで、無量の國に於て、善と智の眞實に限りなき佛陀の如きは非ざるなり」とて經に説く所の三寶に就きて懇に説き諭し給へり。語を次ぎて曰く。「男女貴賤老若を問はず、三寶に歸依し奉るものは幸なり、信する者皆地獄の業を免がれて、天に生じ安穏の處を得ん、汝等將に我に隠家を取るべし、我よく汝を護り導かん、汝等何ぞ誤まれるの甚しき」と。

次の句を引きて曰く

佛に信をれく人は  
苦の世界には行かざらん

永久の繫縛をときすて、  
淨き御國に入りぬべし。

御法に信をねく人は

苦の世には行かざらん

永久の繫縛をときすて、

天のみくにいりぬべし。

僧にしたがふ人はみな

苦惱の世には行かざらん

とはの繫縛をときすて、

淨き御國に入りぬべし。

僧にしたがふ人はみな

苦惱の世には行かざらん

とはの繫縛をときすて、

淨き御國に入りぬべし。

との其他縦横に三寶の功德を説きたまへり。

「教徒よ、佛法僧は汝等をして第一第二第三第四の果を得しむ、汝はかかる大なる救濟にそむきて誤まれり、北丘等よ、若汝心を専らにして佛を念ずれば不可思議の力の故によく煩惱業障を滅除し、心の平和崇高の智慧を得しむ、速に生死の流を越へて無上涅槃の樂土に至らしむ、故に此一事を守るべし、すなはち佛陀に歸命する是なり、教徒等よ、昔古一人の愚人ありて隱家と頼むべからざる所を隱家として、遂に惡魔

スタッフも憚ばるべし、攬せられざる水を飲み、我が意のまゝに商品を賣り捌くを得べしとて曰く、「我先にゆくべし友よ」と。

慧闍は次に行く事の利なるを知りたまへり、「先人の平坦にせし道路を通行せん、舊き草は先人の牛に喰まれたるに我れはやはらかき新芽を得ん、カレースタッフも新らしきを得べし、水も先人の堀りし井より汲まん、價は先人の定めたるに従ふべし」と、かくこれらの利を見て曰はく、「いざ友よ汝は第一次に行くべし」、愚なる商人「さらば」とて彼の荷車を用意して出立しぬ、恙なく無人の地を通過して沙漠に來かゝれり。此處は惡鬼の住む處にして、水なき地なり。されば商人は飲水多量に用意して行きぬ。商人の沙漠のなかばに來りし頃惡鬼おもへらく、我等彼の持ち來せる水を捨てしめん、すべて彼等の反抗する能はざるまでに苦しめて各を喰らひ盡さんと。乳の如く白き牛にひかせる麗はしき車に乗り、弓、矢、劍、楯等をもちたる十人乃至十二人の惡魔を従へ、商人に會せんといそぎぬ。彼は主人の如く車上に座し、水百合の花環をもちぬ、頭髪も衣服もすべて濕り、車輪は泥土にまみれたりき、従者亦彼に前後して來りしが毛髪衣服より水滴り白蓮の花束もて飾り、赤き蓮を手にもち、水草の莖を噛みつゝ行きぬ。惡魔商人を見て道を譲り、懇に彼を遇し、「何處より君は來たまひしや」と問ひぬ。

商人亦車をいそがせ、道を譲りて曰く、「我等はベナレスより來りぬ。而るに我が見る所によれば、君は蓮、水百合等をもち給へり、蓮の莖を食し、水や泥にしたりつゝ來たまへり

の餌食となりぬ、されど絶対に安住せる人は善運を見出しね」といひをはりて嘿然たりき。

アナーチアビンジカ坐より立ち大聖を頂禮し奉りて曰く、

「世尊、佛陀にそむき奉りし彼等の非なるは明なり、願はく

は彼等に其愚人につきて告げたまほんことを」と。

世尊のたはく、家長よ、此は我過去に於て十善を行ぜし間の一の出來事なりしなり、諦聽すべし、貴き香油もて金盃を満たせし如く聽けよ」と。世尊のたはく、家長よ、此は我過去に於て十善を行ぜし間の一の出來事なりしなり、諦聽すべし、貴き香油もて金盃を満たせし如く聽けよ」と。世尊時には東より西へ、又或は西より東へ旅しぬかくして流轉生死の間に没し去りし商人等が注意を呼び起しに、恰かも清月黒き雪雲の胸中よりあらはれし如く無礙自在になりぬ。

昔カーニシ國のベナレスの町にプラマダツタとよべる王ありけり、菩薩は其時商人の家族に生じたまひき。事なく成人して彼は商法に從事し常に五百の牛車をもつて交易しつゝありき。菩薩時には東より西へ、又或は西より東へ旅しぬ

同時に一人の愚かなる商法に熟せざる若き商人ありき。一日菩薩貴重の商品を滿載して出立せんとせしに、愚なる商人亦五百の車を率ゐて出立せんとせり。菩薩もへらく、若し彼愚人、我と共に來らんには、道路狹隘にして一千の牛車を通ずるに難し、人々薪や飲水を得がたく牛は草を喰み難し、何れか先に行がざるべからず」と。

商人を呼びて共に計り何れが先んぜんには如かず、如何となれば、踏み躊躇ざる道路をゆき、觸れる草を得、最上のカレー

「さなり、彼處に見ゆるは綠深き森なり、其處より上は全國水に満てり、降雨も常に絶えず、そこかしこに蓮もて掩はれたる池あり」と。車順次に行違ふ時惡魔又いへらく

「君は何處に行きたまふや」

「かくかくの國へ行かんとするなり」

「而して此等の車は何を載せたまふか」

「かくかくの貨物を」

「さらば終りに來る處の荷はいと重たげにみゆ、かの中には何を入れたまふか」

「水なり」

「君は此處まで水を運ぶは注意まれり、されど此處よりは水を要せず、君の志さす處には水多量なり、とく甕を破り水を捨て、安らかにゆきたまへ」と、言を加へて曰く、「君進みたまへ、我いたくおくれたり」と暫時進みて見にずなるや惡魔の家にかへりぬ。

愚かなる商人欺かれしとは知らず、深く彼が言を信じ、たちどころに甕を碎きて水を覆し（一杯の水もあまさず）荷の輕きをよろこびて出立せり。

然るに彼の行手には一滴の水だもなく人は一杯の水も飲む事能はずしていたく疲勞せり。

日暮に及びて牛を車につけたるまゝ各渡のあまりそこそ

に臥れ伏しぬ。

深夜黒鬼は鬼の市より出で來りて人も牛もみな殺し肉を喰ひ、骨を残して去りぬ。五百の車以前のまゝに打すて人なく牛なくたゞ白骨のみ累々たりき。

愚なる商人の出立後一月半を経て菩薩町を出立しつ沙漠に至るまで直線に進みたり。其處に於て彼は水甕を満たし、太鼓を打ちて衆を呼びあつめ告げて曰く、

「我に問ふ事なくして、一盃の水をも用ゆる勿れ、又此荒野には毒樹あり、我に問ふ事なくしては汝等の嘗て食するなき花も實も葉も食する勿れ」と、深く從者を戒めて沙漠に入りぬ。沙漠の中央に來りし時、惡鬼又現前して菩薩を誘はんとせり、菩薩彼の何物たるを知りたまひぬ。れもへらく、此處には一滴の水なし、即ちアリット沙漠の名の起りし所以なり、此等の人々は紅眼を有して形容粗豪なり、かつ何等の影なし、我先に行きて歸らぬ商人は必らず此等に誘はれたるなるべし、されど彼等惡鬼は我の如何に賢くして資力豊かなるを悟らじ」と。

然る時彼曰く「ゆけ、われらは旅せる商人なり、我は行先如何に水多からんとも、目に見るなくば一滴も捨つる能はず、若幾分なりとも見るを得ば我等荷を軽くする事の如何に利なるかを了すべし」と。

惡魔過ぎ行きし後人々菩薩に曰く「主よ彼等は綠の林のあるを告げ其彼方には常に降雨ありといへり、彼等は水草を持ち蓮の莖をかみつゝありき、彼等の衣服、毛髮等もすべて濡れたるに非ずや、われらをして水を捨て荷を軽くして速に行

かしめたまへ」と。

菩薩彼等の言をきく後、車を止めしめ、人を集め彼等に問ふて曰はく、

「此沙漠に嘗て池或は湖ありと告げし者ありしや、」

「我等は嘗て聞かざりき」

「然るに或人は綠の林の彼方に雨降るといへり。如何にとほく雨雲はみゆるや、」

「一リ一ヶほどなり君よ」

「今汝の誰か雨を含みし風を感じするや」

「雨雲はみゆるや、」

「而して雨雲の頂は如何に遠きや」

「さらば汝等に其雲の一片をだに見る事ありや」

「四五リ一ヶなりといへり」

「否君よ」

「電光はいづれの遠きに閃めくといひしや」

「否君よ」

「否君よ」

「さらば雷鳴は聞こゆるや、」

「否君よ」

「されよ、人々、彼等は皆惡魔なり、彼等は我等を誘ひて水を捨てしめ、われらの弱さにつけて殺さんとするなり、我等の先にゆきし商人は彼等の爲に殺されぬ、彼等の車は荷つけしまゝ荒野に打捨てあるべし、我等今日そを見るべし、汝のゆき能みだけ速かに行け、半杯の水も捨つる勿れ」と。

## 告白

### 清らかなる一生

かくいひて彼は進行したりしに路傍に數多の車、荷をつみしまゝに打捨てあり、人牛の白骨の散亂せるを見たり、人々深く恐れぬ。されば嚴に野宿を張り、劍をもちし護衛をあき牛車を中にかこみて臥し、曉明をまちぬ。

次日萬事速に用意をなし整然として目さす處に着し數倍の利を得て無事に歸りきといふ。

説き終り世尊曰はく、

\* \* \*

\* \* \*

\* \* \*

\* \* \*

世人薄俗、ともに不急の事をあらそひ、此劇惡極苦のうちに於て、身を勤めて務を營み、以て自ら給濟し、尊となく、卑となく、貧となく、富となく、少も長も男も女も、ともに錢財を憂ふ。これある人も、これなき人も、これを憂ふる思は、まさに帶し。屏營愁苦して念を累ね虚を積み、心の爲に走使せられて安き時とでもなし。田あれば田を憂ひ、它あれば它を憂ひ、牛馬、六畜、奴婢、錢財、衣食、什物またともにこれを憂ふ。田なければまた憂ひて田あらんを欲し、官なければまた憂ひて它あらんを欲し、牛馬、六畜、奴婢、錢財、衣食、什物なればまた憂ひて、これあらんを欲す。まさに一あれば、また一を少しき、益なき思想に身心ともに勞し、坐起安からず、憂念相隨ふ。

『大無量壽經』

「此沙漠に嘗て池或は湖ありと告げし者ありしや、」

「我等は嘗て聞かざりき」

「然るに或人は綠の林の彼方に雨降るといへり。如何にとほく雨雲はみゆるや、」

「一リ一ヶほどなり君よ」

「今汝の誰か雨を含みし風を感じするや」

「雨雲はみゆるや、」

「而して雨雲の頂は如何に遠きや」

「さらば汝等に其雲の一片をだに見る事ありや」

「四五リ一ヶなりといへり」

「否君よ」

「電光はいづれの遠きに閃めくといひしや」

「否君よ」

「否君よ」

「さらば雷鳴は聞こゆるや、」

「否君よ」

「されよ、人々、彼等は皆惡魔なり、彼等は我等を誘ひて水を捨てしめ、われらの弱さにつけて殺さんとするなり、我等の先にゆきし商人は彼等の爲に殺されぬ、彼等の車は荷つけしまゝ荒野に打捨てあるべし、我等今日そを見るべし、汝のゆき能みだけ速かに行け、半杯の水も捨つる勿れ」と。

「此沙漠に嘗て池或は湖ありと告げし者ありしや、」

「我等は嘗て聞かざりき」

「然るに或人は綠の林の彼方に雨降るといへり。如何にとほく雨雲はみゆるや、」

「一リ一ヶほどなり君よ」

「今汝の誰か雨を含みし風を感じするや」

「雨雲はみゆるや、」

「而して雨雲の頂は如何に遠きや」

「さらば汝等に其雲の一片をだに見る事ありや」

「四五リ一ヶなりといへり」

「否君よ」

「電光はいづれの遠きに閃めくといひしや」

「否君よ」

「否君よ」

「さらば雷鳴は聞こゆるや、」

「否君よ」

「されよ、人々、彼等は皆惡魔なり、彼等は我等を誘ひて水を捨てしめ、われらの弱さにつけて殺さんとするなり、我等の先にゆきし商人は彼等の爲に殺されぬ、彼等の車は荷つけしまゝ荒野に打捨てあるべし、我等今日そを見るべし、汝のゆき能みだけ速かに行け、半杯の水も捨つる勿れ」と。

に、其翌日下に舉ぐるが如き何とも形容すべからざる悲しき、ありがたき文に接したのである。實に清らかなる一生尊むべき往生である。そこで私が思ふには恰も同時に同地より招かるゝは、是恐くは眞々の間に御引き寄せと深く感じて、直ちに承諾して同地方の傳道に赴くことになつた、後にてきけば我を招かれしときは、まだ七島家とは何等の交渉もなかつたとの事、益々不思議の感に堪えません。十三日の曉ニ本松に着してみれば宿する所は七島家の菩提寺たる顯法寺。様に立て後の山を望めば新墳土高く、其側に松一株の植えたるは乃ち武子女の墓なりと院主にきいて、夢かとばかり人世の無常を感ぜさせていたゞきました。其夜は七島家に於きて謹みて靈前にて讀經を爲し、一族の人々を初めとして一郷の人々に此の如き廣大なる御導きを感謝して貴ひました。詳しくば時報欄に譲りて、最もありがたかりしは父母兄弟姉妹信仰麗はしきがなかに、祖父の君は中風にて病床にあること七年、仰臥したる儘にて唯念佛の聲静かに大悲を仰ぎ喜びたまへることである。床には聖人が雪中石を枕として眠りたまへる闇を掛けて、うらうらと喜んで居らるゝ様は實に崇きことである。三年以前に醫師は命且夕にある由いひし爲め、十分葬式の準備整ひしが、さほどの事なく、皆其儘保存してあるとて笑ひ喜びて居られた。今は武子女の清らかなる一生と尊き往生とを告げんために、渡邊君より私と君か親友安藤文祐君に寄せられた手紙を掲ぐることにした。 常観記

## 右申上度如此御座候。敬具

八月廿九日

近角先生

妹七島だけ

渡邊安治

別書の通り書き今朝差上けんと存候處、計らずも電報に接し取り急ぎ出松仕候、最早間に合はず既に往生をとけ居る後に候、依之書き直して差上けんと存候へ共、わざと其儘差上候、妹は今朝三十日前五時三十分に逝き申候。

遺書を見出し申候が兩親宛の書面何共涙あり候。

先立つ不孝を充分のべ居る處ろ切實に候御憫察被下度願上候。

只佛陀大悲の攝受をありかたく謝し奉る事に候。

南無阿彌陀佛

○

謹啓時下殘暑難凌候處先生には益御清適の御儀と奉賀上候、而て地方御化導より御歸京に相成候こと、奉存候、扱唐突ながら申上候が妹の身上につきては一方ならぬ御配慮を蒙り、御蔭様にて御佛の御慈悲を必と感得いたし、平安歡喜の日暮をなし得候こと、これ偏に先生の御導と難有奉存候。

昨今病勢益つのり命旦夕にせまり、傍に見るさへつらく相成候、妹も今は何共助かるべき道なしと思ひてか、余命のことは何にも氣にとめず、昨日は父に御尊號の掛物を病室にかけて貰ひ、切りに念佛いたし候由、前途に光明を見つゝ喜び居り候は何よりも生等大に歎喜するところに候、吁先立つ子は善智識種を其外の化導を受け申候、只妹の心中兩親に先立つの心苦しき様に候、兩親は先年生の兄と弟を失ひ、今又末子なる妹を失ふこと故十分心中は察せらるゝことに候が、兩親共悲みの中にも益佛恩の大なるを感じつゝ、念佛罷在候間之又御心配被下度願上候。

妹の遺言中、幼少より貯へ置きたる金子の中、求道會館へ何分にても寄附申上度旨有之候に付、亡き後にて寄附申上くることよろしく候ことなれど、寧ろ命旦夕にせまるる今日、遺志を遂行するも妹か往生の素懷を満足せしむること、存じ、茲に金十圓御送金申上候間御受納被下度願上候、萬々…先生よりの御受書が、妹の命ある内に読みきかせ得るならばこよなき慰めかとも存じ候、其外小學同窓會や幼稚園孤兒院らしきものへ、極少しにても寄附いたしてくれとの遺言も有之候、何にもかも命のある内にと亂筆亂文とも顧みず一書認め申候。

も相語り御念佛を共に／＼唱へ候、先立つ子は善知識とか、吁々、小生も百外の化導を受け、益御慈悲が、ありがたく感じ入候、武子は愈廿日前五時半東天紅なるとき何の苦痛もなく御念佛の裡に兩親兄姉に守られて往生を遂げ申候、たゞ兩親に先立つことの如何に心苦しかりしかば日頃の話によりて察せらるることに候、それに兩親とても先年二男と五男とな失ひ今亦末女武子を失ひしことて悲哀の心中察するに餘り有之候、されど佛陀の大悲に信頼し他力の御本願を頂かせて貰ひし甲斐には此大なる悲みの中に妹の平安に往生せるを見て安堵念佛致居り候、武子が我が命終り候は見給へかしと申置しもの有之候、故死後早速に取出し読み候其文をも左に録し置き候、御覽被下度候。

御名残りまでに一筆書き残し申候、さて私事はこれまで永き／＼年月の間何一つ御兩親様を御喜ばせ申せしこともなく、また、御安心あさせ申せしこともなく、唯始終御心配のみ御かけ申候事、實に／＼御申譯け御座なく候、さるにその御恩の萬分の一も報じ申さず先立ち候こと此上もなき不孝者に候、

何も／＼無常の娑婆のなりゆきと御許し給り度候、

先立つは不孝の極とさゝしかど

無常の風は拂ひてもなし、

いざさらば一と足先きに蓮の上

いづれも出たらめに候、あまり勝手がましくは候へども

あとは何分宜しき様御願申上候、

死亡通知御願申す知己朋友は左の通り

(住所氏名細々に書きあり候

右の通知等は安治中兄へ御願申度ものに候、亂筆御免破下度草々、

御雨露親相御詩に

命中はかゝる遺書のあること少しも知らず居り候ひし)、筆書き残し申候我等事女の兄弟とては只一人に候もの

から何かにつけ御心配下され母様と同じく思はれて誠に  
難有御なつかしく存じあけ候、在世中の御恩報じ様もな  
く一と足お先きに御待ち申居り候、  
近頃は御前様も殊の外體弱くならせ給ひし故、折角く  
御厭ひ遊はすやうくれくも御願ひ上け候、病氣と壽命  
は別物に候へば、「かたみ」のことは宜敷様御願申上候、  
未ながら兄上様皆様へよろしく願上候先はこれにてかし  
て、

はれ此世の御暇乞

へ、私事は末子のことゝて兄弟皆様の御厄介にのみ相成候、中にも、貴兄様の慕しくてはいろ／＼とつきまとひては御心配をかけ申候、御骨折もさせ候こと、何とも申上やう御座なく候、御恩はとても報じやうなし、此上は唯大悲の親様の御許にて御待ち申上候、

卷之三

る。時武子は「朝夕に唯願るなり姫々しくも、大和武雄のほまれあげてよ」の歌を送りし由にて死後に開き出し歎事に候。

彼はまた、其當時戰地に於ける傷病兵の事を思ふの時看護婦となりて看護し慰藉宿志漸く盛にして抑制すべくもあらず、茲に貴兄の斡旋御盡力により女子文藝學會に入ることと相成、武子の喜び非當なるものにて候ひき、然るに此大なる喜びは却て仇にて候、彼は出京し入學するその間もあらせ世にも人に嫌忌せらるゝ肺癌とはなりし者に候、この病に冒されしを報へ來り候時は一家を擧げて落膽の淵に沈み申候、人生は畢竟塞翁が馬の喻に漏れず年來の宿志を遂げて遊學する此重患にかかる、されど幸にも東都に於て貴君の親厚なる友情を以て看護されしこと今更の如くに感ぜられ候、貴君より妹の出京につきても亦病にかゝりける時より死に至るまで、終始一貫益同情を寄せられたる事、とても鉛紙に墨す能はず候、君なかりせば妹の生命は今日此頃まで保つ能ぱりしものな、病にかかりし妹は其後御姉君の許に静養すべく小田原に行き候、夫れより鎌倉へも轉地いたし候、此頃のことにて候ひし武子は世をばかな頃間に入り候、して貴君には非常なる御心配をかけ漸く煩悶より救ひ出したることも候ひき、貴君の御同情御姉君の御懇惫なる御說得、かくして御佛は捨て給ふことなく近角先生を透して前途に大なる光明を認めさせ頂き大なる恩藉を得て平安に日暮をさせて頂く身となりしこと深く感謝し居る事に候、彼は餘幾幾何もなしと思へるものか、御承知の通り去年の秋鎌倉なる轉地先より歸宅いたし候、とても、助からぬ身と思へば兩祝の許に一日も多く目送りいたしたく、不幸なる話にはあれど兩親の温かき手にすがりて死になしとは一夕の談話にて候、かく覺悟いたし候ものゝ然もなく食もすゝみ氣分快き時は或は全快とまでは至らずとも何にからぬ身と思へば兩祝の許に死にたしとは、醫者となるには何に／＼の學科必要なるべきかとて、醫學に必須なる書籍など取り出しては學びし事も有之候、ある時は又一庵を構へ念佛三昧に日送りせんかなど申し合ひたる事も候ひき、此事は貴君も其相談にのられし事もあるべし、武子の室の一隅に、

武子

はすやうくれゝも願上候、  
此の事御手數様ながら  
(恩人や友達への遺物の事を書きあり候)

され度願上候かしこ、

安治兄上様御許に  
武子

右武子が書き残し置いたる手紙何れとても涙の種に候、愚痴と御笑ひ被下度候、同頃すれば妹の身の上はどいたばしきはあらずやと存候、その年いと若かりし時親戚の勧め兩親の命によりて巴もなく他家へ嫁し候に、思ひかけなく力と頼む夫は日夕いふに忍びぬ行ひのみなれば、されど、一の不平不滿をも口外せず、姑を輔け家業に勧めいたし居り候、されど、當時其地方の新聞になど夫の亂行と共に武子のもてばやされしことも有之候が、何様吾等の名よこしと凡情にかられ強むて離縁いたさせ候、當時妹の心中只姑御と其家業をいかにせんやの情切なるのみに候ひき、吁々、吾等はつたながりしと思ひ候、何故其時強むて離縁せしめしやと思ふのに候、かくして家に歸りける妹は直に東都に遊學せんとの念願にて候も時ならずして小兒貞治の病氣にかかりけるを看護すべく相成候、その看護の實に至誠專意兄の快氣な是れ祈り、吾れば一度他に嫁せしもの世に用なきもの兄の身代り出來得るならんにはと一心に念願いたし居り候ひき、されど、貞治の病は癒ゆべくも見えず重りおもりて遂に此世のものにあらずなりぬ、彼れ死の前日折から掛けたりし「人事無邊」福第の書の額面を指し兩親に告げて曰く、人事過りなし今日の怨みは來自の樂み幸福必ずしも喜ぶべからず悲哀も亦苦むべからず健康も倚みにならず只専意佛陀の慈悲に歸順するのみと、懇ろに說き了りて遂に逝去いたし候、此時の武子の悲み察するに餘りあり候、而して武子は又も遊學を思ひ立ち候、されど機は熱せず日露戰役となり阿兄も出征することに相成り候てより毎夜其鄉社に詣づること百有餘日に涉り申候、一日も缺くることなく阿兄の健康を祈りし事家人も驚きし程に候ひき、而して長友聞部宗景君の出征せら

11

實に至誠事の如きが大いに成り、されば一向似に好むしもの世に用ひきもの兄弟の身代り出來得るならんにはと一心に念願いたし居り候ひき、されど、貞治の病は癒ゆべくも見えず重りおもりて遂に此世のものにあらずなりぬ、彼れ死の前日折から掛けありし「人事無邊」(福第の書)の額面を指し兩親に告げて曰く、人事過りなし今日の怨みは來自の樂み幸福必ずしも喜ぶべからず悲哀も亦苦むべからず健康も憎みにならず眞尊念佛陀の慈悲に歸順するのみと、懇ろに說き了りて遂に逝去いたし候、此時の武子の悲み察するに餘りあり候、而して武子は又も遊學を思ひ立ち候、されど機は熟せず日露戰役となり嗣兄も出征することに相成り候てより毎夜其郷社に詣づること百有餘日に涉り申候、一日も缺くることなく嗣兄の健難を祈りし事家人も驚きし程に候びき、而して長友岡部宗城君の出征せら

一、今日一日決して腹を立てまじき事

露はかり怒らで忍へ忍ひては  
山より高く徳はつむらん

一、今日一日の存命を喜び己がのためを盡すべ之事

右は今日一日の謹みにて候必ず守り申す可く候也、  
有之候、尙はかつ武子は病の傳染を恐れて自分の使用物は勿論何にても真邊に  
あるものに對してはぬる事無き。左の如きは、

あるものに對しては他人に接せしめる様いたしから對する折も心を用ひたが  
て出さんにも封じ日は必ず清き水を以て湯し唾液は一切用ゐず候、病重りな  
ども用便其他も堪へ得る限り必ず自分にてなし僅み深きには看護人も深く感じ  
矣、間見に心配かうとこゝに告げられておつた。

『聞かれて心酉がましとて苦しま中に生れアニシくよくなりまつ』とは何のことにて候ひき、貴君の態々七十里の遠路を遠しとせず見舞に御出下され時の彼れの喜びは一入にて候らひしが、あの元氣はつけ元氣にあらて眞に喜びぬより病苦を忘れるものに候、其喜びの顔色は延て兩颊とも又よく発して中

然るに貴君の御歸京ありし後は天候の不順につれ一段と弱り申候、尙ほ當時  
之大學病院にて治療しけるを心配せしが全治と聞きては矢も楯もたまらず一刻  
十ヶ面會したしとて待ちに待ちにガレ居り候が死の兩日前即ち廿七日に面會

ときの彼の喜びは最早此の世に残り惜きもの一もなしと云はんばかりの面色  
決らひき、其後次第に弱り行き到底寝かへりも力及ばずなり凡て人手に委ゆる  
となりては一々謝辞を述べ死ぬる二三時間前にも附添の厚き看護にいたく禮を

心、夫より姉の東京より持ち來たれる薬物を食し、かすかに念佛を稱へ、平安室内の人々を婆娑の見おさめと見廻し「お母さんの顔がわかるか」との姉の問ひなどと見しが、此世の終りに候、回想して又も此處にいたり申候、何卒御

御可被咸下候、草々、  
生死の苦海ホトリナシ  
彌陀弘誓ノフネノミゾ  
ヒサシクシヅメルワレララ  
ノセテカナラズワタシケル、

319

恩愛ハナハダヽチカタク、生死ハナハタツキカタシ  
念佛三昧行ツテゾ 罪障ヲ滅シ度脱セシ、

卷之三

南無阿彌陀佛々々々

五

入信歡壹

杉崎大愚

明治卅九年九月四日一七日の夜佛前に於て認む

渡

清江先生集

· 5 ·

卷之三

前略此間貴君より御通信有之候らひしが豫定の如く  
近角先生には去る十七日午前當地御通過相成候は當地に御出迎ひ夫より御伴致し  
御見送り申上此夜は二本松なる秋の生家にて御講話を御願申上候  
其節先生は二本松顯法寺(生家の菩提寺)に御座敷より遙かに新しき  
墓標を見給ひ武子が物せし「先つは不孝の極とさゝしかど」の歌を想ひ合されて  
が、

遺音何堪雨窓誦  
涙灑寒山墓下松  
と弔詩を賦せられ候、時しも只暮暉の秋雨音窟々たるのみに候らひき、蕉翁の句  
に「露の世は露の世ながら去りながら」なども有之候らひしが、何と申しても凡  
夫の劣情、見るにつけ、聞くにつけ、只悲しくのみ感ぜられ候、此頃は何となく家  
の内もひそやかに森陰の氣に充満濁ち愁の雲の家の棟にも漂ふかと思はるゝに不  
思議の御縁にて先生の御巡化に遇ひ雖有一旅大に歡喜致し申候、  
夫より先生の御伴致し福島まで參り昨夜歸宅仕候、委曲は後便にて萬々申上可く

安  
藏

卷之三

卷之三

と宣ひしが頗る吾身に適切なるべしと思ひ、吾は最早賢人らず、宜しく静かに念佛すべきなりと歸結して、急に未だ僧名に改めなきを幸ひに自ら大愚とは決したり。されど念佛も暫くにして何となく其たよりなき心地をなし、更にありがたみもなし。隨而何つまでも相續すべくもあらず、矢張迷惑は滾々としてつきず、人の前には威張りたし、衒ひたし、賢乙がられたし、譽められたし、かくて益出でゝ益爲善なり更らに大膽にも一事業に着手せんと思ひ初めたり。不幸か幸か又財力の乏しさを歎く、人の無憲なるを責む、力も及ばざれば今少し學ばんかなど痛心焦慮止む時なく、「矢張自ら愚物にも馬鹿にもなれないものだ」と人に語れば、其人酬いて曰く「大愚と銘打つたは大賢ならんことを吹聴するものだ」と、

る苦悶は遂にやるところなく、窮に更に大膽なる企ても踏海萬里、身心の生活状態を一轉して奮闘的に鍛練し來らんかなど考ふるに至りき。

今にして思へはこれ悉く、吾等の絶對の信仰慈愛の佛陀を忘れるたる當然の事なりしなり。

かくて意志薄弱なる吾は、僅かなる情實を含める注告によりて此大膽なる企ても終に止み果てたり。而して尙到底自己良心もて自覺せる罪惡丈にても折伏し得る剛のものたること能はず、況して一剎那の造罪も八億四千と示されたる罪惡をや。

吾は愈々立つて信仰の道を求むべき切なる思ひは催し初めたり。——佛か——神か——吾友剛峯子神に往き明かに救はれたりと叫ぶ。彼が熱烈の信仰、清酒なる行動、確かに吾眼に映し來りて頂門の鐵槌、心胸の清劑なりき。彼のが熱烈なる日頃の友愛は腐れる吾を見ても其愛情を捨てず、須らく「神の攝理の貴兄の上に下し玉はんことを」と涙と共に祈りき。

吾未だ全く精神の癪痺し居らざるか、前後頗る動きぬ。而も彼は我れの主義信仰を重んじて必ずしも信仰の同一ならんことを強いず、されど「真理は一にして道もまた一なり」と叫びぬ。吾益々勤きて多少佛教非なりと叫ひぬ。されど小膽か、將た柔弱か、直ちに決心し得ざりき。吾は彼れに告げぬ今一年を猶豫せよ、二十餘年貪り來りし吾道、未だ着質なる造詣に入らずして棄つるは餘りに道に忠ならざるも甚しきものなり、されば遠からずして必ず道を求めて進まんと思ふ、

よ此處よと馳せ狂ひ、ろれよこれよと脇み苦み、あの書藉よ、この講演よとあせりたちながらも、着實に學はず、靜坐沈想せず、而して頭が悪いと自失し、解からんと歎き、徒らに光蔭を冗過し、大切な人生修養の最時期を逸失す。齡將に而立に近からんとして後悔追ひ難しと雖も、過くる一日最後懺悔の涙潛然として下る。然れども坐せんか往かんか其爲すところをしらず、吾二十才以後初めて宗教的教訓を聽くことを得て以後、少しくは良心に於ける罪惡の自覺を具へ得たりと云ひ得べきか。内心頗る自己が善事と思ふことも實行し得ず、否益罪惡の穴に陥りゆくを苦み悶えぬ。然れども執着の意馬心猿は頻りに危地に向つて驅り、尙益狂はんとす、心苦内痛を盛すと雖も自ら矯伏すること能はず、無下に吾意志の薄弱なることをも自覺すと雖も、所詮吾良心の權威自信を以ては心猿意馬に打克つこと能はず。言は美に失すれども罪惡なりと自覺しながら、自ら苦痛を感じながら、然も自制慾已薄弱にして、道徳的苦痛に悩みたりとも云ふべきものなるか。内に少し斗りにても良心の苦痛を覺ゆる吾は行爲の上に外見を謙み始めたる結果、一事一行一舉手一投足悉く僞善となりて現はれ来るなり。——ア、これいかにもして改めざるべからず、早く身心を洗潔ならしめて自己天職の使命に活躍せざ

若し求めて得ずんば蹴然基督に從ふべしと。」

彼遠からず南滿洲に征かんとす、涙を濛へて吾に告げて曰く、希くは靈肉共に健全ならんことをと、かくて袂を分ちぬ。吾は益々心氣騒々として靜止せず、文字に索めて得ず、遂に決意して（十月）近角先生を叩きぬ。——先生が着書中「信仰の餘瀝」は世の求道者最も深き味ひを此中に見出し、未だ先生に見へずして入信歡喜する人多しと聞く。——ア。吾は何たる愚妄ぞ、去る三十四年夏、吾大坂にありて再三之を讀過せりき、而して未だ其要を摂み得ず愧死に價すべし。——先生溫容慈語、醇々として開導せらる、其意解かりしが如く解からざるが如く、心頭朦朧たり。幸に學舍に滯在することを容るされて兎に角も内心の安靜を得たり。此夜第一高等學校青年會は學舍に開かれたれば幸に其席末を汚しぬ。先生は唯一信仰の粹要を提示せらる、——「夫无碍難思光曜滅苦證樂、萬行圓備嘉號消障除疑」の文字一入尊くば感じぬ。翌日九段阪佛教俱樂部に於ける先生の「清淨心」てふ講話中、「淨清心なるものは吾等の持つて居るものではない、實に絕對慈悲の佛陀の御心である、吾人は唯此佛を信することによりて佛陀の清淨心と融和する、即ち佛心を吾等に得る、之を正信とも云ふ、吾等無始劫來の煩惱惡心實に汚れたる心を、佛陀の清淨心によりて洗ひ潔めらるゝ教はるゝ、而して吾等が信すると云ふ、其信するに至ることそれすらも自力で以て信するのではなし、偏に他力の无碍光の御催である、宗教の救濟は實に此點

會に對つて何等價値なきものとなるべきのみならず、本願念佛の本旨にあらじなど考へてはこれも止みぬ。學舍の富岡君よりも兩度斗り信仰談を承り、又毎朝歎異鈔の輪讀及靜座拜讀しゆくまゝに、かすかながらに絕對の信の經路は授けらるゝ心地もせり。一夜外出不圖人力車に乗り深く感する所あり初めて佛陀の慈愛救濟の慈懷を氣づかせて頂きたり。よろこびて之を故山の先生に告白す、先生誠めて曰く、「敢て一時の現象に執する勿れ」と、吾亦大に感するものありき。されど顧へば來京以來吾求道的態度は頗る緩寛然たり、自ら解する能はざる斗りなり。然しながら此間愈吾は偽善者であつた、一點偽善にあらずと推すべき美點の存せざることを深く、  
感じ極めたり。かくて吾は彼の先聖法然親鸞が御盛德の御身にして、愚痴よ愚禿よと自ら名乗り玉へるものいかにも畏れ多く存すると同時に、いかばかり惡人正機の本願救濟者として自らかくも適切に表情あらせ玉ひたる御信念のほど、吾この小さき愚なる脳にて計ひ奉りてさへ實に無限の尊さを感じぬ。此章にして味ひ得るならば絶對慈愛の佛陀が本願力に於てをやなど思ひうかびては誠に尊ふとく嬉しく感じ入りぬ。

而して幾度か輪讀する内に彼の歎異鈔第二章に於て、吾は絶對信仰の門戸と堂奥とを一時一處につかみたる心地はしき信仰は皆かくの如くなりしなりと心づきては、毛頭吾等が小さき愚なる胸もて計り奉るべきもの何處にかかる。吾は

に於て無上の味ひがあるので……かく誨へ玉へることは吾に於て最も適切にありがたく感じ、不覺南ムアミダ佛と偽りなき唱名が出たのであつた。翌朝はまた求道學舍講演に於て、「圓融の教」と題し玉へり、これも確かに吾が爲めに題し玉へるなりと感じたり。「圓融とは決して佛教の眞理とか理屈と云ふやうな乾燥なものではない、眞如、法性、一如、眞理、圓融、などは生ける佛陀の妙境界である、……」とは確かに吾が腦裡に温き情喚を感得せしめ玉へり。——かくて吾は「嘆異鈔」「信仰の餘瀝」「求道」「信仰問題」「清澤師懺悔錄」などを特に新らしき感想を以て読み初めたり。一轉せしが如き境遇は自ら罪と遠かり、而して新らしき感想もて読み行く腦裡には漸次に一種の溫味を加へ来るが如く覺る。されど朦朧たる腦裡は未だ全く天空海闊など云ふ如き希望の感に至らず、何となく未だ物足らぬ心地にてありき。——先生は遠く故山の空に傳道せらるべく出發せられたれば、心細くも如上の書中に文字を辿りぬ。されど中々は心機一轉すべくもあるを實驗獲得すれば特別なる靈感、若くは意義狀態を醸して、一轉心機の清朗たるが如きことにてもあるかの如く思惟して、何となく未だ物足らぬ心地にてありき。

——先生は遠く故山の空に傳道せらるべく出發せられたれば、心細くも如上の書中に文字を辿りぬ。されど中々は心機一轉すべくもある至れば恐懼の限りなり。加之倦みては睡り、嫌きては變ふ、自ら何のために來れるやを自失するに至る。又其腐甲斐なるに吾自らあき果て、一層斷食もやなどとも思ひ及びぬ。されど薄志弱行か、こは、先生の本意にてはあらず、而して吾にして斷食苦行の賜として得たる信仰などならば、他日社

る能はずなりぬ。吾若しこれを信じてそらごとならんには、親鸞法然は愚か群聖星の如き先信の方にも諸共に地獄に落ちゆくべきにてさら後に後悔あるべからず」と吾れ叫びたり。ぬ。かくて吾は安心決定、更らに疑心なし。此上は佛陀に人格あれば結構此上なし。されどなくとも吾に於ては別に危ふからず、信する上に佛陀は在す、信する上に淨土は存す、信する上に救濟は實なり、信する上に自他安樂なり、而して信ずる上に煩惱具足の吾こそ正機と示し玉ひたるならずや、而して信其物すら自信にはあらず、佛陀廣大の御催促なりとはいひにも尊からずや。サラバ信是れ光りなり、「遇此光者三苦消滅身心柔軟」「觸光柔軟」「極重愚人無他方便……」「夫无碍難思光耀滅苦證樂」「三千大千世界諸佛證誠護念」今に至つて經釋無量他意なきを知る。更に想ふ吾祖聖應大師三昧定中天得如來出現し玉ひ、「汝行不可思議而難得順次往生教速疾往生之勝因授與融通念佛」これ實に今絶古絕の實驗宗教にはあらざりしが。歴史的に自力他力の中間に發展せる本宗は今や歴史上の價値以外之を認められず、寧ろ現在に於ける本宗の萎衰を觀て理數の然らしむる處悲むに足らず怪むに足らずと人も吾も秋の扇のそれの如く棄て、顧みず。否吾こそは昨夜までかく信じまた滔々として人に向ひてかく語りしは何たる正法誹謗の道悪乎。歴史的宗教は信仰上に於ける地位を與えられるものなり、吾は本宗の歴史的觀察を穿ちに排せざるべしされどソハ觀察なり、吾は今より此新らしき信念によりて宗祖の眞實なる信仰を味ふ。否宗祖の眞實なる生ける信仰が、今や佛陀の御催によりて吾信念の上に極めて新らしく且つ適

切に仰かせ玉ふことを信じ奉りて、無量の歡喜を、ありが、たく存し奉ることを得る。ア、吾は大慈悲の願懐を信じ、願船を信じ、願土を信じて更らに疑はず。これにて最大の安心決定す。久遠却來偏へに御計ひに漏るゝことを得ざる吾、今にして漸く廣大の慈光に眼覺めて安住することを得たるもの、されば此後いかばかり苦悶の運命に遭遇するとも、みなこれ如來の御計ひなれば只管如來の奴隸たることを決して毛頭怨恨の情など加へ悲まず、こは如來を辱め奉る業なるか故に。吾らが自己の上にても又人生社會の上にても、善と思ふも眞の善にはあらず、惡と思ふも眞の惡にあらず。そは吾らが僞善者の骨頂罪の塊なりと云ふことの些も僞りにあらざる者なるが故に。無始却來宿業の招くところ現殃の感するところいかんともすることなし、最早小サキ恐なる道徳的苦痛などは毛ほどの役にもたつものにあらず、而して吾全く打忘れたるの感あり。これも明に佛陀救濟の恩恵なりと歡ぶ。久しき間迷ひ苦み悩み闇をしも、全くこれ佛陀大悲の御催しなりき。久しき間道徳的苦痛など思ひ悩みしは、此廣大他力を打忘れて頼むべからざる小サキ恐なる自力ばかりを頼みとしたりして當然の事實なりしなり。

如此吾れ自ら僞善者の骨頂、罪の塊たることを自覺し、其無始却來宿業の招く所、現殃の感する所いかんともすべからざること、即ち自力の全く零なることを自覺し、佛陀の大救濟こそ無碍自在なることを仰ぎ、萬行圓備の嘉號を信ず。かくて吾れ益々慈懐の天地を歎喜し、人生を眺めては柳は綠り花は紅、悉く是れ盡十方無碍光佛の慈眼視衆生福壽海無量の大安養界にあらざることなし。吾れ實驗入信の歡喜茲に盡きたり、南無阿彌陀佛（略）。

吾が安心決定は喫異妙第二章全文なり

吾れ人生問題の最も綱りたる簡潔なる解決を歎びたるは清澤先生體扇日乗中

「南無阿彌陀佛」の一條にして、先生は蓮如上人御一代略書第百二條、一、丹後法眼、蓮應、衣裝調へられ、前々住上人の御前に伺候時、仰せられ候。衣の襟を御たゞきありて南無阿彌陀佛よと仰せられ候。又前往上人は御聲を叩かれ南無阿彌陀佛にもたれたらよと仰せられ候ひ。南無阿彌陀佛に身をまるめると、仰せられ候と符合申候」とあるが咀嚼せられて、

先生は

「萬物の存立、萬化の發展は皆是れ南無阿彌陀佛なり、——之を知らざるものは愚なり迷惑なり、之を覺せるものは智なり悟なり」と、示し玉へるものこれなりき

### 信心歡喜

朝顔の手をたてられてよるべかな。

今日の講話殊に有難絶對の慈光を感じ申候信心と申す心之は聞より私心には候はず、如來の佛心を信じて感喜し奉る心持にて候、無上の救濟を承り心づきてみれば、佛の御手が常に舜に仆れんとする私の前後に立ちより玉ひて、仆れさしと計ひ玉ふ御慈悲は、朝顔に似たる吾身の、若し打棄てられんには、地をばふ外に衝もなきものを、唯佛の御手のみありてよるべを示され、愚にも曲りくの吾心を、御佛の手を繕りて危き普世を心強くも心易き生涯に翻へして嬉しく、辱なく感じ奉り候、宛もこれ朝顔のたてそへられし手に靠りつゝ、曲りくにたちそたつ彼の生涯にも酷似たることを思ひ出て、感喜極る、

嘆呼尊し南無阿彌陀佛。

## 悲母の哀愍佛陀の攝受

藤村三次

私は山間僻僻に生れし不學文盲の一寒生にして、幼より種々の病に犯され其病間父母の慈愛なる看護、殊に母は萬能の愛を以て殆んど寢食を忘れて、或は神に祈り或は佛に誓ひ良薬とし云はゞ自ら行き求めて、私に服薬成さしめ給ふ、然れ共天は無情なる哉如何なる藥も更に効なく病症日々に加はり、今は將に死を待つの外なし、此時私の苦悶及父母兄上等一家族私の瘦顔せる顔貌脹くれたる腹を見ては悲み、醫師亦死を告ぐ、私は勿論一家の悲哀此上なし、此れ私が十六歳の冬なりき

元來私の隣家は何れも眞宗なれ共、私の家は眞言宗にて諸願祈禱を事とす、母宿に一心真念に弘法大師様に病氣平癒を祈られたり、而して私を諭して曰く「汝の病氣は最早人爲を以て如何とも成す能はず、此上は神佛の保護を頼ふに如かず、故に汝自心にも弘法大師様を祈れよ」と茲に於て私も自分の苦しさに一心に弘法大師様を念すたり、(此時一心に念佛摺へし内に「空海の心の内に咲く花は彌陀より外に知る人なし」との御御讚は私の今日仙力宿に入るの因となり)然るに或日知人來りて私の痛苦に呻吟せるを見て告て曰く「如斯厭れた腹には生醜を其嚙んで食せば苦悶忍にして去る」と此言を聞きし母は喜ぶ事限りなし、直に兄に命じて之を求めしも、兄亦喜びて之を求む、勿論田舎の事故一尾の生醜容易ならず、乃ち道程三里も行き漸く或家の飼醜二尾を詰ひ受け、貧醜を食する一日にして、今迄醜石更に效なかりし腹水も、少しも後を止めざるに至る、嗚呼不思議なる哉、實に此時私の喜びは更なり父母兄上等の喜び一方ならず、母は曰く「此島に弘法大師様の御利益なり」と、今日より考ふれば私の病氣は慢性腹膜炎なりしならん、

其后一年程稍々健康なりしが、又々咳嗽咯痰(血痰)等ありて

家族大に驚く、時に醫學博士三宅先生開院の當時にて診斷を仰ぎしに肺デスマとの事にて、服薬數月病勢一進一退更に著効なし、母は復々以前の如く重症に陥るらんかと心配せられ、朝な夕なに御看護被下しに、母も亦感染して全病に犯さる、然れ共母は苦ともせずして只管私の病氣平癒を思はれし心情は實に只今にても眼前に見える様なり、嗚呼慈悲なる哉、而して不幸は茲に止まらずして又々顔面頭部等に濕疹を生ぜしが、母は膏藥を貼りて下さるやら散藥を散布するやら一々數ふ可からず。如斯私は前后種々なる病魔に犯されしに係らず母は五年間一日の如く自分の病氣をも苦とせず寢食をも忘れては御看護下され、剩へ其病氣は私の病氣より感染せしと明かなり、思ふて茲に至れば不孝此上なきもの、身も戰慄す、然れ共如斯高恩をも、佛陀の何たるを知らざる間は自分の苦痛の去ると共に何時の間にやら去りて、自分は獨り育ち、自分の病氣は自然に治せしものの如く思ひ居りしは、慚愧の至りなり

其後母の病氣も治し私も全快し一家平安に暮しけり、斯の如く私は病氣の爲め小學校を卒業せしのみにて、甚だ成らず遊び居りしに、或人の進めにより不學文盲を顧みず、小學校の雇教員に奉職し、在職中教員の受験を出願し、漸く正教員の資格を得て、卒職兩三年、時に私の隣家に眞宗の一信者あり、此人不學なれ共非常に法を察ばれ、且つ盲目の事故徒然の餘り私を訪問せられ、時々信仰上の話など聞かせられしも、其頃私の思想は自分の無學不智なる事を悟らずして、心理學の端くれをも嘗て居る事なれば、自分は大智者大學者を氣取りて、彼の信者云はれし事をば妄想幻覺と侮り、實に勿體なくも佛教なるものは道徳を實行する爲め愚人を教へ説く可きものと思ひ、殊に眞宗の如きは卑屈なる宗教なり、自分は教育者なり、天皇陛下の御勅語を守れば何ぞ佛教の力を借らんやと、教會大家と云はれし人の口風似をして自分は實踐躬行の士と誇稱すれ共、自分の行

爲な反省すれば朝夕言行相反し、人よりして彈指せらるゝ豈に慚愧の至ならずや、然りと雖人生の迷夢は未だ覺醒せず、名利の大山に彷徨して中學教諭の受験せんと努力せり、偶々人あり、獎むるに醫學研究を以てす、自分も思ふに中學教諭よりは醫者は金も儲かるし、慈善的にも行ふを得れば寧ろ醫者たるに如かずと思ひ一轉せりへ此時の慈善と思ひしは爲善たるは勿論なり、茲に於て醫書を購求し餘暇を以て研究する事一ヶ年、更に斷然職を辭し研究する事一ヶ年に於て前記試験に及第せり、此れ昨年五月なりき、然るに後期となりては實驗の學なれば向れ上京せざるを得ず、而して六月上京せんかと思ひしも、其際母と共に養護を成し居りて、第二學期即ち九月上京せんと思ひ居たり

偶々昨年舊六月十八日の夜より母は俄然嘔氣嘔吐發熱を以て病床に臥せられたり、其后嘔吐發熱は止みしも時々下痢食氣不進全身倦怠等ありて、羸瘦日々に加はりて非常に憔悴せり、醫師は診断して曰く 糖尿病と云へり、而して慢性疾患にて澱粉食を勧め肉食せざれば治せずと、田舎の事故新鮮なる肉を得るには困難にて、魚肉獸肉と進むれ共、日頃嗜好せる魚肉をも發病后は食はれず、寧ろ澱粉食を食はれたり、其后病勢は一進一退著効なかりき私は膝下にありて看病成し居りしが、光陰は人を待たずして早や八月も半を過ぎんとす、母は病中の苦悶をも厭はず私をして早く上京せしめんと、防寒の用にて病中吾を忘れて真心込めて績がれし真綿を以て短胴を注文せられ、私の上京を待ち居られしものなり、而して病氣は日々に重れ共毎日起きて散歩せられ、告ぐるに軽快を以てせり、九月上旬即ち私の上京を期待せし頃となりぬれば、病氣は全快せりとて私に彼の短胴を示し、「汝は早く上京可し、吾の病氣は全快せり、憂ふる足らず、既に一期后れ居るにも不拘第三學期をも后れねば既に一年も后る、次第なれば疾く既往の罪惡は私の思想海をして益々暗黒ならしめたり

なりしが、國よりの報に私の着京の報至ると共に病勢日々に加はり、私の出立後一ヶ月余にして遂に黄泉の客となれり、此の報をうけて一時は非常の悲みに沈みしも、深く人生の迷夢に沈醉せる事故思ひ直して母の最後の遺訓に副はんと一意専心に勉強して、今年九月の試験には是非及第せんものと努力せり、然るに豈に計んや試験には見事落第せり此亦斯くある可き等ならずや、茲に於てか人生の迷夢は稍醒めんとし、既往の罪惡は私の思想海をして益々暗黒ならしめたり

試験中第二日目の日に失敗して失望落胆せり、會々知人新名氏に何處にか眞宗の教あらんやと尋ねしに、氏は九段の第二求道會森川町の第一求道會を教へられたる、仍て第三、求道會に至りしに近角先生の御講話ありて、初めて「諸行は無常なり是れ生滅の法なり、生滅滅し己れは寂滅是れ樂となる」との御言を御説明に預り、實に自分は此迄之無常なる事を知らず、當にならぬ人生を當として千百年も生通しなてる機縁ひて、當てにならぬ人生百般の行為の不如意なるは實に茲に在る事を御聞かせに預り、實に入れる心の間も計られざる吾等たる事を教られては、自分は以上の不孝の罪ある事を思へば、一時一刻も猶豫ならず、へ其れより信仰之餘懇、求道、死之間題等種々の書籍を見たり

其次の土曜日には「光は近きに在り」との事を御聞かせに預り其内に佛陀は耶罪惡深重煩惱具足の私をは見そなはされて、盡十方世界念佛の衆生をして攝取して捨てずとの仰と承り、罪惡深ければ深程捨てずとの仰せ、此難有御言葉を御聽かせに預り、實に私は感涙數滴欣喜雀躍の思をなせり、嗚呼實に私如き不孝の者に同情せらるゝ者何所にかあらんと思ひしに、佛陀は罪惡深重なればなる程捨てずとの廣大なる御慈悲難有も恐れ多き事にて、此言葉を御聽かせに預りし以來は友人等と談話の際等には佛陀の廣大なる慈悲なる事を談じ、若し謗

上京す可し」と、家族も母の健康を裝ひし状態を見て全快せしものゝ如く思ひ上京を促せり、茲に於て私は醫師の宅を訪問し母の病氣如何を尋ねしに、重症にて予後の不可なるは勿論なれ共非常の慢性病なれば上京する方可ならんこと、茲に於て斷然上京と決せり、實に此時私は愛欲の廣海を沈没し名利の大山に迷へる事とて、如斯母は思慮ある大慈悲を以て、自分の今死に頻せるを自覺せるにも不拘、私の成功を思ひ吾を忘れて計られし慈愛の計をも、名利の大山に迷へる私は實に浅間敷も母の病氣は二三年も掛るやも計られず、かくては成功の時期を失す、且つ私居ればとて只看病するのみにて何の効もなし、若し上京しなば大家の説をも聞く事なれば宜き方法もあらんと、此の母の慈愛なる熱情に報ゆるに天地も入れざる不孝の心を以てせし、實に言語筆紙のよくすべき事にあらざるなり、而して母は何くれとなく着物其他萬般の事に至る迄細々と注意され、出立の朝の如き、朋友知人送別の爲とて來られし者をして病者の如く見せしめず。其際母より將來健康の爲とて賜はりし盃は、母に於ては死別の盃涙の充満せし何共形容す可らざる盃をも、名利の大山に迷へる私なれば其當時左程にも感ぜられざりしが、今致の鏡に照されて見れば断腸の念ひなり、實に此悲哀なる境界は佛陀以外には知る人もなし、尙出門の際にも母は力なげに見送られ、身體を大切にして一意専心に勉強せよ吾れの病氣は憂ふに足らずとの御言は今は最後の教訓最後の遺言となれり、嗚呼難有は親の慈悲なる哉、報す可きは佛恩なる哉、其後母は病勢以前の如く其上の欣喜雀躍口に云はんとして云ふ能はず筆にあらはさんとしてあらはす能はざりき

然るに僅一日餘にして又々常の如し、茲に於て多く人の信仰を喜ばれし人は一二週間以上も續けり、然るに自分は斯く何ぞ短目なりしか、思ふに信仰の無きによるならんと知人新名氏の宅を訪問して此言を聽きしに、(此人は既に確信せられし人なり)其にて可なり、斯く思ふも煩悶なり、歎異鈔を見よと教へられたり、此時大場と云ふ人も全様の言を云はれたり、其跡何となく愉快なる心して歎異鈔を購ひ見しに第九章に明に此状態を示され其他難有事共示されありて、人は愚と云ふが狂と叫ぶが佛陀の御慈悲に問はなし嗚呼難有事ならずや、

其より近角先生の御講話には何時も聽き度なり、實に佛陀の廣大なる御慈悲の難有と共に、先生の御恩の深きを思はざるを得ず、實に先生なかりせば吾斯く容易く信仰に入る事を得ざるなり、謝しても謝す可らざるなり、

要するに私の既往の歴史は實に此れ佛陀引入の方便、有難きは佛の慈悲親の恩、親切なる近角先生の御講話、實に報す可き哉感謝す可き哉、南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛、

ありがたや彌陀の光に照らされて

心に起る曇りだになし  
ありがたや他力の舟に乗せられて

着く可き先は彌陀の御下に、

# 歎異鈔

近角常觀

## 第一 章

各々十餘箇國のさかひをこえて、身命をかへりみずして、たづねたらしめたまふ御ころざし、ひとへに往生極樂のみちをとひきかん。しかるに念佛よりほかに往生のみちをも存知しまつた法文等をもしりたるらんところにくくおぼしめしおはしましてはんべらんは、おほきなるあやまりなり。もししからば、南都北嶺にも、ゆきしき學生たち、おぼく座せられてさふらぶなればかのひとぐにもあひたてまつりて、往生の要よくくさかるべきなり。親鸞におきては、たゞ念佛して彌陀にたすけられまいらずべしと、よきひとのおほせなかうがひりて、信するほかに別の存細なきなり。念佛はまことに淨土にむまるたれにてやはんべるらん、また地獄におつる業にてやはんべるらん、總じても存知せざるなり。たゞ法然上人にすかされまいらせ、念佛して地獄におなたりとも、さらに後悔すべからずさふらぶ。そのゆゑは、自餘の行をばげみて佛になるべかりける身が、念佛をまうして地獄にもおちてさふらばこう、すかされたてまつりてといふ後悔もさふらばめ、いづれの行もおよびがたき身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし、彌陀の本願まことにおほしまさば、釋尊の説教、虛言なるべからず。佛說まことにおはしまさば、菩薩の御釋虛言したまふべからず。菩薩の御釋まことならば、法然のおほせそらことならんや。法然のおほせまことならば、親鸞がまうすむれ、またもむなしかるべからずさふらぶ歟。證するところ、愚身が信心にをきては、かくのごとし。このうへは、念佛をとりて信じたてまつらんとも、またてんとも面々のおはからひなりと云々。

講じさして戴くこと全く廣大なる佛陀の御めぐみと感謝し奉つる次第であります、かくの如き有縁の次第柄ゆゑ殊に此章に至りて一しほ感泣に堪へませぬ。

各々十餘箇國のさかひをこえて身命をかへりみずしてたづねきたしめたまふ御ころざし、ひとへに往生極樂のみちをとひきかんがためなり。

久しう親鸞聖人常陸を中心として關東に於て傳道したまひし時、面授口決を受けし御同行達聖人の歸洛したまひし後深く聖人を慕ひたてまつりて數百里の道を遠しとせず、十餘箇國のさかひをこえて、身命をかへりみずして、たづね來りたる人々に對して直々の御教化なり、かくも熱心に眞面目に道を求めたまふ御ころざし、たゞ往生極樂の道を問ひ極め出離生死の問題に安心するより外に何等の他の目的あらざるべし、との御仰せなり、蓋し其言葉は劈頭直ちに求道の真精神を掲げ來つて信仰問題の眼目に向つて、警告を加へたまふ御誠なり。

しかるに念佛よりほかに往生のみちをも存知し、また法文等をもしりたるらんと、こころにくくおぼしめしおはしましてはんべらんはおほきなるあやまりなり。もししからば、南都北嶺にもゆきしき學生たち、ねぼく座せられてさふらぶなれば、かのひとくにあひたてまつりて、往生の要よくくさかるべきなり。

直ちに念佛よりほかに往生のみちをも存知せずと斷言したまふ御言葉即ち是れ先師法然上人の御教、南無阿彌陀佛、往生之業念佛爲本其體であります、しかも言葉それ自身までか同様で

これは一世に名高き歎異鈔の最大要所として、現代求道者の口に絶えざる金言であります、近代歎異鈔が青年の間に行はるゝにちよびて、ことに此章を尊重したてまつることであります。が實は近頃の青年に至りて、始めて斯くなりたわけではありません、古より篤き信仰の人は何れも歎異鈔を尊み、歎異鈔を尊むものは必ずし、此章を尊む次第であります、おもひめぐらせば私幼少の時、父が他の一人の僧分及び五六の同行と共に團欒して夜のまとひに此第二章を反覆熟讀して喜んで居られたことを小供心に記憶する次第であります、又清澤先生がに團欒して夜のまとひに此第二章を反覆熟讀して喜んで居られたことを小供心に記憶する次第であります、又清澤先生が此鈔を自ら玩索して、是を青年の手に渡されたのが近時行はるゝに至りし濫觴であります、私としては、去んぬる明治三十五年の十一月二十八日即ち親鸞聖人入滅の聖日に於て郷にありて夜半燈の下にて熟ら是れを拜讀し奉り、此第二章の文字こそ實に是れ親鸞聖人が、自督を述べられたるもの即ち信仰の告白なりと感じ、直ちに筆を取りて簡潔に鑽仰の情を寫し求道學舍來集の人々に送る文を作つたのであります。其翌日父は母と共に京都本山より下向し來られしゆゑ、早速是れを読み上げしに父は殊の外に之れを喜びたまひ、今は頗る有難し、もう以上にかくなと申された、再び机に向つて筆を續けんとせしに、果してもはや同様の靈感を描くことはできなんだ、それ故父の言の如くそれだけに止め結文を加へ、東京へ送つたのであります、即ち「信仰問題」の中頃に入れてある「親鸞聖人の信仰」といへる文字が、あれであります、これが私が歎異鈔を味はくして戴く本であります、爾來今日に至るまで學舎に在りては毎朝此鈔を輪讀し又全國到る處に此鈔を

あります、即ち南無阿彌陀佛、往生の業には念佛を本と爲すとの御教より外に往生の道を存知せぬと自然に口に溢れ出了たのである、其念佛より外はないといふ確信を二點の餘地なき點にまで此一節に言ひ盡されてあります、曰く、「念佛よりほんべらんはおほきなるあやまりなり」と云ふ其意は、遠く關東より十餘箇國のさかひをこえて身命をかへりみず、たづねきさしめたまふ御ころざし、唯々往生極樂の道を問ひきくためであらう、其往生の道は念佛より外はない、若しや念佛より外に往生のみちを存知して居ると思ひ、猶ほまた珍らしき、耳よりなる法文沙汰を知りて居るならんと羨ましく思ひて道を求め來られたならば、そは大なる間違である、數十年來親鸞が説き廣むる所決して他の事はない、更に親鸞めづらしき法をもひろめず、如來の教法をわれも信じ、人にも教へきかしむるばかりなり、唯念佛の一つ即ち如來の御名號南無阿彌陀佛の外はないとの仰である、蓋し歎異鈔の出來た所以たる法文沙汰が既に當時にあらはれつゝあつたものと見えて、夫に向て痛く諷めたまひたのであらう、法文沙汰や學問沙汰や、理窟の沙汰は、宗教の爲め信仰の爲めには少しも入用はない、若し夫れが知りたひといふならば奈良や叡山に多くのえらい學者達が御いてになる次第なれば、その人々に御出會して往生の要をきかれた方がよろしからんと、一黙の餘地なき點にまで念佛の外はないことを示したまひた、我々幸にしてかの如き聖人の直々の御言葉を拜聽するものは深く之を服膺せねばならぬ、

何んとなればこれは聖人が當時の法文沙汰をする人に對する御誠とのみ心得て、昔嘶のやうに思ふたならばかくの如き生きた御言葉に接した所詮はない、私が常に口癖に言ふ次第であるが人生問題信仰問題は千古同様の問題である、出離生死往生極樂といへる安心の道は二つあるべき筈はない、昔の宗教とか、今の宗教とか、舊信仰とか、新信仰とかあるべきものでない、此御言葉の如きは現代の様に種々の研究やら、哲學やら、理論やら、學問沙汰を以て信仰を求めるとするものに對する動きなき御誠である、猶す、みて極言せば、今日信仰を求むる人がもはや學問や理論で信仰に達せんと考へる人はなからうが、されど何か珍らしき、耳新らしきことをきて、夫て安心が出来るであろう、何か不思議な現象に接したり、一種變りたる心的狀態になつてみたい、かくの如きことが信仰に入る道であろうといふ様が夢想がないでもない、少くとも踊躍歡喜の狀態になつてみたい、信樂開發の時刻に到りたいとの切なる望を以て満たされつゝ安心出來ぬ人が多いやうである、こは畢竟自分の心ばかりを眺めて佛陀の大慈大悲を仰がぬからである、歡ばんとつとめるのではなく、信ぜんとりきむのではなく、唯々廣大なる彌陀の大慈大悲の選擇本願無阿彌陀佛の念佛の外はない、唯之を仰ぐのみである、信ずるのみである、兎角人間といふものは何處までも計ひ心のあるもので、念佛の一つであるとさけば、その念佛とは如何なる意義であるかと昔は昔風で宗學と成り、今は今風で、宗教學となり、信仰の一つと承知しながらも計ひ心を交へる勿體なきことである、他方眞實をあかせるもろ／＼の聖教は

本願を信じ、念佛を申さば佛になる、其外何の學問かは往生の業なるべきや、たとひ聖教であらうとも法文沙汰となつては恐れ多い、念佛より外に往生のみちはないとの御言葉はあるゝ心地がする、しかも聖人は我々が申すやうに念佛より外に往生のみちは無いとは仰せられぬ、存知せぬとの仰せである、故に知り難ければ他の人々にさけと仰せられる、飽まで私なき御言葉には感佩服膺してまつるの外はない、念佛より外に往生の道を存知せぬと仰せらるれば仰せのまに／＼信じてまつるの外はない、そこで心を空しくして次の聖人の御自督を承らねばならぬ。

#### PATERNAL AFFECTION.

Some feelings are to mortals given,  
With less of earth in them than heaven;  
And if there be a human tear  
From passion's dross refined and clear,  
A tear so limpid and so meek  
It would not stain an angel's cheek,  
'Tis that which pious fathers shed  
Upon a deteuous daughter's head.—(Scott.)

### 嘆　咏

左 千 夫

不思議や茲に光あり、  
かすかに針の先ばかり、  
見えみ見えずみ有がてに、  
遠く遙けくちばゆれど、  
吾を導く光かも、

善惡淨穢の差別なく、  
あまねくたすけん御誓ひ、  
只信心を要とすと、  
只信心を要とすと、  
あな尊とのみ言かな、  
光に添へし力なり、

罪を罪とし知らざりし、  
吾を悲しく顧みて、  
無常は人の上ならず、  
はかなき身をと悔るくれば、  
頼みてたよる物をなみ、  
世はとて間に冷はてぬ、  
たふとき文をさぐり得て、  
苦惱を出づる道たどる、

## 秋の歌

甲

之

もみぢ葉のすがけむ君をもふときうつし此世に  
また力あり

近く母を失ひける友悲しき音づれに「咲きたるゝたわわ  
の萩に風立ちてこぼるゝ花にこぼろきなくも」の歌そへ  
たり。かへしの歌

君かことも吾が身のごとく思ほえてまどふ心をい  
かにかすべし

うづら鳴く古さと野への朝夕に眺めし山のふもと  
の君か家

かげろひの夕さりくれば山かけの狭田の水の音心  
しむらむ

み墓べのみ草にしどど置く露の塙へぬ思ひのいた  
いたきかな

吹く風にたわわ散る萩しがもとにな鳴きこぼろぎ  
心いたきに

同じき友の弟去年身まかりけるをしづびそがみ魂につぐ  
る歌

ありのままの心語らむ吾友にとはあふべきすべ  
もありなくに

空渡る天つ月日はすぐるともわすれて思へや君が  
ま心を

うつし世の迷ひの長路しばらくも直路行きなむ手  
をとりかはし

あかねさすひんかし聞く國原を見さけすかしき君  
かちくつき

紫の胡麻の花さく畠道を一人み寺にまゐるともし  
さ

河端にさく朝かほのうす色は水のきほひに消ぬべ  
く思ほゆ

み墓べのふるき枯はなとりすつる草むらすださこ  
ぼろぎなくも

み墓べの草むらに咲く紫のいや濃き桔梗折りてさ  
さげぬ

山あほふ朝霧はれてたちまちに尾のへに開く空の

## 藻屑

青淵

むなしき思ひゑのぶる歌

志都兒

正岡先生五週年忌の日詠みける歌

臥して見る秋海棠とめでましゝ秋海棠は桺近くし  
て(根岸庵)

常病に臥せる大人が身思ほへて秋海棠をみれば悲  
しも(同上)

簾笠や秋海棠や鳥籠やかなし思ひの胸にみつる  
も(同上)

吾が戀ふる大人が臥所はそこと見て眼うつせば秋  
海棠の花(同上)

鶴頭も秋海棠もいましゝに變らずと聞けばいよ  
悲しも(同上)

科野路はまだ頃早み葉がくれに柿のあけみを漸く  
に見る

み佛にさゝげんものとまだ小さき柿にはあれどと  
りて來しかも  
枝ながら折りてさゝげし家の柿一枝に五ついまだ  
骨けど



雜

## 錄

◎陽明學新論 文學博士 高瀬 武次郎著

本書は著者が多年の研鑽に成れる王學の眞髓を、最も明確に且つ該傳に記述されたるものである、叙に曰く

東亞の天地か眞潮あり、曰く鄧魯思潮、曰く荊楚思潮、曰く印度思潮是なり、前兩者は禹域發生して後者は東漢の初に當て西域より東漸せるものなり、爾後佛教は一萬千里の勢を以て思想界に深入し、直に鞏固なる根基を有し、六朝の末に及ばず思潮互に衝を争ふの狀を呈したれども、未だ三者混合の結果として一新哲學を産出するに至らず、漢魏六朝の間、時に或は二教一致若くは三教合一の說を立てるものありしも、極めて淺薄粗鄙にして未だ精密細緻なる哲學を爲すものあらず、李唐に至て道教領に勢力を増し、佛教も亦愈々盛を致せとも、猶未だ佛教に對して著大なる變動を與るを見ざりしも、趙宋に至ては佛教哲學蓬勃として興起し、周末以來未嘗有の盛況を呈するに至れり其の此に至るや由て來ること遠く、漢魏以來或は衝突し、或は接近して互に變化を蒙れる三教は、自ら其面目を更むるものあり、(中略)所謂性理學の勃興であるは勿論之を三教化合的產出なりと謂ふべからざれども、漢魏以來漸次二教より被れる影響によるもの少しとせず、(乃至)等しく性理學と稱するも之を精察し來れば大に同じからざるものあり、所謂程朱陸王派の如きは其顯著なるものなり、程朱は即物窮理說をとり、事々物々皆定理ありとして經驗的に之を推究し、陸王は心即理說を取り、心外無理、心外無事と唱へて直覺的に至善を求めるなど、前者は常に達心的傾向を帶び、動もすれば根幹を忘却して枝葉に馳せ、支離滅裂繁衍に陥らんとするの弊あり、後者は常に求心的傾向を帶び動もすれば茫茫々として杳冥施蕩枯祥虛老に流れんとするの弊あり、(中略)

王陽明年十七親迎して廣信を過ぎ、一齋を訪て聖人必ず學て至るべき旨を聞き

深く相契る、(中略)陽明の學は心即理、知行合一、致良知を三綱領となす、三者互に鼎定の關係を有すと雖、其之を唱ふるの時處に至ては則ち相同意からず

初年の學多く心即理を説き行爲の至善を求むるの問答多く、中年には知行合

こは一讀其要點を擧げたるもの也、以て著者が達識を知るを得ん、而して其檢究は精密緻密にして飽迄周到也、章を分つこと七、發端、哲學、宇宙觀、人生觀、天地萬物一體觀、倫理說、性說、心即理說、知行合一說、良知等評論、事功及詞章、事功派學問派、遺著、參考書類なり、是れ著者が心血を注がれたる大著にして、世の王學の蘊奥を窺はんとするものの羅針盤たるを得ん、(東京日本橋區原文盛堂發行、定價金壹圓參拾錢)

## ◎印度文明史 文學士 常盤 大定著

印度の歴史は不明にして佛教研究者を初めとし常に遠慮とする所なり、此缺陥を補はん爲に著者は多年の研鑽を傾けて本書を編纂せられたり、自ら序中に言へる如く、ダット氏の印度古代文明史を以て中軸となし、其他参考に供せられたるも泰西人の著書だけにても十四五種もあり、其他藏經中より材料を得て皆之を咀嚼して編入せらる、結論としては、印度文明の特色、印度文學の概観、印度文學の缺點、印度研究の影響、印度の見聞錄、近世印度研究小史、佛道の漢譯小史、印度の年代、印度文明の五時期を敍し、本論として一吠陀時代——五河地方時代、二、婆羅門書時代——中國時代、三、教學勃興時代——金印度時代を詳にし、婆羅門書、ウバニシャツドマハーラタ、法經、家經、補經。六派哲學を詳にし、最終に佛教を敍し、附記として四、佛教時代の概観、五、婆羅門教復興時代の概観を敍せり、蓋し印度文明の大勢を盡し、且つ研究多面に涉り、古代の神話より、詩歌、宗教、哲學に涉り、他の一面は日常生活より社會狀態を詳かにし、人種の移動地理の研究各時代盛衰興亡の跡に至るまで飽迄行き届いたる親切なる著書也、佛教研究者は是非一本を座右に供へて参考に供せざるべからず、(東京日本橋南文館發行定價四十錢)

## ◎佛陀の聖訓 文學士 常盤 大定著

大藏經の洗滌にして容易に之を讀くあたははざるは衆人の體とする所にして、適當なる簡約摘要せる書籍を欲するば數十年來佛教者の希望たりしが、常盤大定師の一にして、父兄が以て著闇の料とせられし、一章なり國家に對するも宗教に対するも、子弟が其父兄に對する愛慕の誠心を發揮するに在りとは父兄の急願なりしことを記憶すと章を分つこと五、曰く理論と實行、聖典と教訓、譬喻と註釋、教理と所感、佛教と家庭、又節を分つこと二十、其主なるもの實行の難、先見の性易きに在り、而るに諸を難きに求む、人々其親心親とし、其長を長として天下平かなりと、余は往時常に家庭に在りて父兄より此の如き孔孟の格言を習ひ、其習慣は遂に第二の天性となりたるものか、(中略)此れ余の五十年間を指導せし圓誠のーにして、父兄が以て著闇の料とせられし、一章なり國家に對するも宗教に対するも、子弟が其父兄に對する愛慕の誠心を發揮するに在りとは父兄の急願なりしことを記憶すと章を分つこと五、曰く理論と實行、聖典と教訓、譬喻と註釋、教理と所感、佛教と家庭、又節を分つこと二十、其主なるもの實行の難、先見の性易きに在り、而るに諸を難きに求む、人々其親心親とし、其長を長として天下平かなりと、余は往時常に家庭に在りて父兄より此の如き孔孟の格言を習ひ、其習慣は遂に第二の天性となりたるものか、(中略)此れ余の五十年間を指導せし圓誠のーにして、父兄が以て著闇の料とせられし、一章なり國家に對するも宗教に対するも、子弟が其父兄に對する愛慕の誠心を發揮するに在りとは父兄の急願なりしことを記憶すと章を分つこと五、曰く理論と實行、聖典と教訓、譬喻と註釋、教理と所感、佛教と家庭、又節を分つこと二十、其主なるもの實行の難、先見の性易きに在り、而るに諸を難きに求む、人々其親心親とし、其長を長として天下平かなりと、余は往時常に家庭に在りて父兄より此の如き孔孟の格言を習ひ、其習慣は遂に第二の天性となりたるものか、(中略)此れ余の五十年間を指導せし圓誠のーにして、父兄が以て著闇の料とせられし、一章なり國家に對するも宗教に対するも、子弟が其父兄に對する愛慕の誠心を發揮するに在りとは父兄の急願なりしことを記憶すと章を分つこと五、曰く理論と實行、聖典と教訓、譬喻と註釋、教理と所感、佛教と家庭、又節を分つこと二十、其主なるもの實行の難、先見の性易きに在り、而るに諸を難きに求む、人々其親心親とし、其長を長として天下平かなりと、余は往時常に家庭に在りて父兄より此の如き孔孟の格言を習ひ、其習慣は遂に第二の天性となりたるものか、(中略)此れ余の五十年間を指導せし圓誠のーにして、父兄が以て著闇の料とせられし、一章なり國家に對するも宗教に対するも、子弟が其父兄に對する愛慕の誠心を發揮するに在りとは父兄の急願なりしことを記憶すと章を分つこと五、曰く理論と實行、聖典と教訓、譬喻と註釋、教理と所感、佛教と家庭、又節を分つこと二十、其主なるもの實行の難、先見の性易きに在り、而るに諸を難きに求む、人々其親心親とし、其長を長として天下平かなりと、余は往時常に家庭に在りて父兄より此の如き孔孟の格言を習ひ、其習慣は遂に第二の天性となりたるものか、(中略)此れ余の五十年間を指導せし圓誠のーにして、父兄が以て著闇の料とせられし、一章なり國家に對するも宗教に対するも、子弟が其父兄に對する愛慕の誠心を發揮するに在りとは父兄の急願なりしことを記憶すと章を分つこと五、曰く理論と實行、聖典と教訓、譬喻と註釋、教理と所感、佛教と家庭、又節を分つこと二十、其主なるもの實行の難、先見の性易きに在り、而るに諸を難きに求む、人々其親心親とし、其長を長として天下平かなりと、余は往時常に家庭に在りて父兄より此の如き孔孟の格言を習ひ、其習慣は遂に第二の天性となりたるものか、(中略)此れ余の五十年間を指導せし圓誠のーにして、父兄が以て著闇の料とせられし、一章なり國家に對するも宗教に対するも、子弟が其父兄に對する愛慕の誠心を發揮するに在りとは父兄の急願なりしことを記憶すと章を分つこと五、曰く理論と實行、聖典と教訓、譬喻と註釋、教理と所感、佛教と家庭、又節を分つこと二十、其主なるもの實行の難、先見の性易きに在り、而るに諸を難きに求む、人々其親心親とし、其長を長として天下平かなりと、余は往時常に家庭に在りて父兄より此の如き孔孟の格言を習ひ、其習慣は遂に第二の天性となりたるものか、(中略)此れ余の五十年間を指導せし圓誠のーにして、父兄が以て著闇の料とせられし、一章なり國家に對するも宗教に対するも、子弟が其父兄に對する愛慕の誠心を發揮するに在りとは父兄の急願なりしことを記憶すと章を分つこと五、曰く理論と實行、聖典と教訓、譬喻と註釋、教理と所感、佛教と家庭、又節を分つこと二十、其主なるもの實行の難、先見の性易きに在り、而るに諸を難きに求む、人々其親心親とし、其長を長として天下平かなりと、余は往時常に家庭に在りて父兄より此の如き孔孟の格言を習ひ、其習慣は遂に第二の天性となりたるものか、(中略)此れ余の五十年間を指導せし圓誠のーにして、父兄が以て著闇の料とせられし、一章なり國家に對するも宗教に対するも、子弟が其父兄に對する愛慕の誠心を發揮するに在りとは父兄の急願なりしことを記憶すと章を分つこと五、曰く理論と實行、聖典と教訓、譬喻と註釋、教理と所感、佛教と家庭、又節を分つこと二十、其主なるもの實行の難、先見の性易きに在り、而るに諸を難きに求む、人々其親心親とし、其長を長として天下平かなりと、余は往時常に家庭に在りて父兄より此の如き孔孟の格言を習ひ、其習慣は遂に第二の天性となりたるものか、(中略)此れ余の五十年間を指導せし圓誠のーにして、父兄が以て著闇の料とせられし、一章なり國家に對するも宗教に対するも、子弟が其父兄に對する愛慕の誠心を發揮するに在りとは父兄の急願なりしことを記憶すと章を分つこと五、曰く理論と實行、聖典と教訓、譬喻と註釋、教理と所感、佛教と家庭、又節を分つこと二十、其主なるもの實行の難、先見の性易きに在り、而るに諸を難きに求む、人々其親心親とし、其長を長として天下平かなりと、余は往時常に家庭に在りて父兄より此の如き孔孟の格言を習ひ、其習慣は遂に第二の天性となりたるものか、(中略)此れ余の五十年間を指導せし圓誠のーにして、父兄が以て著闇の料とせられし、一章なり國家に對するも宗教に対するも、子弟が其父兄に對する愛慕の誠心を發揮するに在りとは父兄の急願なりしことを記憶すと章を分つこと五、曰く理論と實行、聖典と教訓、譬喻と註釋、教理と所感、佛教と家庭、又節を分つこと二十、其主なるもの實行の難、先見の性易きに在り、而るに諸を難きに求む、人々其親心親とし、其長を長として天下平かなりと、余は往時常に家庭に在りて父兄より此の如き孔孟の格言を習ひ、其習慣は遂に第二の天性となりたるものか、(中略)此れ余の五十年間を指導せし圓誠のーにして、父兄が以て著闇の料とせられし、一章なり國家に對するも宗教に対するも、子弟が其父兄に對する愛慕の誠心を發揮するに在りとは父兄の急願なりしことを記憶すと章を分つこと五、曰く理論と實行、聖典と教訓、譬喻と註釋、教理と所感、佛教と家庭、又節を分つこと二十、其主なるもの實行の難、先見の性易きに在り、而るに諸を難きに求む、人々其親心親とし、其長を長として天下平かなりと、余は往時常に家庭に在りて父兄より此の如き孔孟の格言を習ひ、其習慣は遂に第二の天性となりたるものか、(中略)此れ余の五十年間を指導せし圓誠のーにして、父兄が以て著闇の料とせられし、一章なり國家に對するも宗教に対するも、子弟が其父兄に對する愛慕の誠心を發揮するに在りとは父兄の急願なりしことを記憶すと章を分つこと五、曰く理論と實行、聖典と教訓、譬喻と註釋、教理と所感、佛教と家庭、又節を分つこと二十、其主なるもの實行の難、先見の性易きに在り、而るに諸を難きに求む、人々其親心親とし、其長を長として天下平かなりと、余は往時常に家庭に在りて父兄より此の如き孔孟の格言を習ひ、其習慣は遂に第二の天性となりたるものか、(中略)此れ余の五十年間を指導せし圓誠のーにして、父兄が以て著闇の料とせられし、一章なり國家に對するも宗教に対するも、子弟が其父兄に對する愛慕の誠心を發揮するに在りとは父兄の急願なりしことを記憶すと章を分つこと五、曰く理論と實行、聖典と教訓、譬喻と註釋、教理と所感、佛教と家庭、又節を分つこと二十、其主なるもの實行の難、先見の性易きに在り、而るに諸を難きに求む、人々其親心親とし、其長を長として天下平かなりと、余は往時常に家庭に在りて父兄より此の如き孔孟の格言を習ひ、其習慣は遂に第二の天性となりたるものか、(中略)此れ余の五十年間を指導せし圓誠のーにして、父兄が以て著闇の料とせられし、一章なり國家に對するも宗教に対するも、子弟が其父兄に對する愛慕の誠心を發揮するに在りとは父兄の急願なりしことを記憶すと章を分つこと五、曰く理論と實行、聖典と教訓、譬喻と註釋、教理と所感、佛教と家庭、又節を分つこと二十、其主なるもの實行の難、先見の性易きに在り、而るに諸を難きに求む、人々其親心親とし、其長を長として天下平かなりと、余は往時常に家庭に在りて父兄より此の如き孔孟の格言を習ひ、其習慣は遂に第二の天性となりたるものか、(中略)此れ余の五十年間を指導せし圓誠のーにして、父兄が以て著闇の料とせられし、一章なり國家に對するも宗教に対するも、子弟が其父兄に對する愛慕の誠心を發揮するに在りとは父兄の急願なりしことを記憶すと章を分つこと五、曰く理論と實行、聖典と教訓、譬喻と註釋、教理と所感、佛教と家庭、又節を分つこと二十、其主なるもの實行の難、先見の性易きに在り、而るに諸を難きに求む、人々其親心親とし、其長を長として天下平かなりと、余は往時常に家庭に在りて父兄より此の如き孔孟の格言を習ひ、其習慣は遂に第二の天性となりたるものか、(中略)此れ余の五十年間を指導せし圓誠のーにして、父兄が以て著闇の料とせられし、一章なり國家に對するも宗教に対するも、子弟が其父兄に對する愛慕の誠心を發揮するに在りとは父兄の急願なりしことを記憶すと章を分つこと五、曰く理論と實行、聖典と教訓、譬喻と註釋、教理と所感、佛教と家庭、又節を分つこと二十、其主なるもの實行の難、先見の性易きに在り、而るに諸を難きに求む、人々其親心親とし、其長を長として天下平かなりと、余は往時常に家庭に在りて父兄より此の如き孔孟の格言を習ひ、其習慣は遂に第二の天性となりたるものか、(中略)此れ余の五十年間を指導せし圓誠のーにして、父兄が以て著闇の料とせられし、一章なり國家に對するも宗教に対するも、子弟が其父兄に對する愛慕の誠心を發揮するに在りとは父兄の急願なりしことを記憶すと章を分つこと五、曰く理論と實行、聖典と教訓、譬喻と註釋、教理と所感、佛教と家庭、又節を分つこと二十、其主なるもの實行の難、先見の性易きに在り、而るに諸を難きに求む、人々其親心親とし、其長を長として天下平かなりと、余は往時常に家庭に在りて父兄より此の如き孔孟の格言を習ひ、其習慣は遂に第二の天性となりたるものか、(中略)此れ余の五十年間を指導せし圓誠のーにして、父兄が以て著闇の料とせられし、一章なり國家に對するも宗教に対するも、子弟が其父兄に對する愛慕の誠心を發揮するに在りとは父兄の急願なりしことを記憶すと章を分つこと五、曰く理論と實行、聖典と教訓、譬喻と註釋、教理と所感、佛教と家庭、又節を分つこと二十、其主なるもの實行の難、先見の性易きに在り、而るに諸を難きに求む、人々其親心親とし、其長を長として天下平かなりと、余は往時常に家庭に在りて父兄より此の如き孔孟の格言を習ひ、其習慣は遂に第二の天性となりたるものか、(中略)此れ余の五十年間を指導せし圓誠のーにして、父兄が以て著闇の料とせられし、一章なり國家に對するも宗教に対するも、子弟が其父兄に對する愛慕の誠心を發揮するに在りとは父兄の急願なりしことを記憶すと章を分つこと五、曰く理論と實行、聖典と教訓、譬喻と註釋、教理と所感、佛教と家庭、又節を分つこと二十、其主なるもの實行の難、先見の性易きに在り、而るに諸を難きに求む、人々其親心親とし、其長を長として天下平かなりと、余は往時常に家庭に在りて父兄より此の如き孔孟の格言を習ひ、其習慣は遂に第二の天性となりたるものか、(中略)此れ余の五十年間を指導せし圓誠のーにして、父兄が以て著闇の料とせられし、一章なり國家に對するも宗教に対するも、子弟が其父兄に對する愛慕の誠心を發揮するに在りとは父兄の急願なりしことを記憶すと章を分つこと五、曰く理論と實行、聖典と教訓、譬喻と註釋、教理と所感、佛教と家庭、又節を分つこと二十、其主なるもの實行の難、先見の性易きに在り、而るに諸を難きに求む、人々其親心親とし、其長を長として天下平かなりと、余は往時常に家庭に在りて父兄より此の如き孔孟の格言を習ひ、其習慣は遂に第二の天性となりたるものか、(中略)此れ余の五十年間を指導せし圓誠のーにして、父兄が以て著闇の料とせられし、一章なり國家に對するも宗教に対するも、子弟が其父兄に對する愛慕の誠心を發揮するに在りとは父兄の急願なりしことを記憶すと章を分つこと五、曰く理論と實行、聖典と教訓、譬喻と註釋、教理と所感、佛教と家庭、又節を分つこと二十、其主なるもの實行の難、先見の性易きに在り、而るに諸を難きに求む、人々其親心親とし、其長を長として天下平かなりと、余は往時常に家庭に在りて父兄より此の如き孔孟の格言を習ひ、其習慣は遂に第二の天性となりたるものか、(中略)此れ余の五十年間を指導せし圓誠のーにして、父兄が以て著闇の料とせられし、一章なり國家に對するも宗教に対するも、子弟が其父兄に對する愛慕の誠心を發揮するに在りとは父兄の急願なりしことを記憶すと章を分つこと五、曰く理論と實行、聖典と教訓、譬喻と註釋、教理と所感、佛教と家庭、又節を分つこと二十、其主なるもの實行の難、先見の性易きに在り、而るに諸を難きに求む、人々其親心親とし、其長を長として天下平かなりと、余は往時常に家庭に在りて父兄より此の如き孔孟の格言を習ひ、其習慣は遂に第二の天性となりたるものか、(中略)此れ余の五十年間を指導せし圓誠のーにして、父兄が以て著闇の料とせられし、一章なり國家に對するも宗教に対するも、子弟が其父兄に對する愛慕の誠心を發揮するに在りとは父兄の急願なりしことを記憶すと章を分つこと五、曰く理論と實行、聖典と教訓、譬喻と註釋、教理と所感、佛教と家庭、又節を分つこと二十、其主なるもの實行の難、先見の性易きに在り、而るに諸を難きに求む、人々其親心親とし、其長を長として天下平かなりと、余は往時常に家庭に在りて父兄より此の如き孔孟の格言を習ひ、其習慣は遂に第二の天性となりたるものか、(中略)此れ余の五十年間を指導せし圓誠のーにして、父兄が以て著闇の料とせられし、一章なり國家に對するも宗教に対するも、子弟が其父兄に對する愛慕の誠心を發揮するに在りとは父兄の急願なりしことを記憶すと章を分つこと五、曰く理論と實行、聖典と教訓、譬喻と註釋、教理と所感、佛教と家庭、又節を分つこと二十、其主なるもの實行の難、先見の性易きに在り、而るに諸を難きに求む、人々其親心親とし、其長を長として天下平かなりと、余は往時常に家庭に在りて父兄より此の如き孔孟の格言を習ひ、其習慣は遂に第二の天性となりたるものか、(中略)此れ余の五十年間を指導せし圓誠のーにして、父兄が以て著闇の料とせられし、一章なり國家に對するも宗教に対するも、子弟が其父兄に對する愛慕の誠心を發揮するに在りとは父兄の急願なりしことを記憶すと章を分つこと五、曰く理論と實行、聖典と教訓、譬喻と註釋、教理と所感、佛教と家庭、又節を分つこと二十、其主なるもの實行の難、先見の性易きに在り、而るに諸を難きに求む、人々其親心親とし、其長を長として天下平かなりと、余は往時常に家庭に在りて父兄より此の如き孔孟の格言を習ひ、其習慣は遂に第二の天性となりたるものか、(中略)此れ余の五十年間を指導せし圓誠のーにして、父兄が以て著闇の料とせられし、一章なり國家に對するも宗教に対するも、子弟が其父兄に對する愛慕の誠心を發揮するに在りとは父兄の急願なりしことを記憶すと章を分つこと五、曰く理論と實行、聖典と教訓、譬喻と註釋、教理と所感、佛教と家庭、又節を分つこと二十、其主なるもの實行の難、先見の性易きに在り、而るに諸を難きに求む、人々其親心親とし、其長を長として天下平かなりと、余は往時常に家庭に在りて父兄より此の如き孔孟の格言を習ひ、其習慣は遂に第二の天性となりたるものか、(中略)此れ余の五十年間を指導せし圓誠のーにして、父兄が以て著闇の料とせられし、一章なり國家に對するも宗教に対するも、子弟が其父兄に對する愛慕の誠心を發揮するに在りとは父兄の急願なりしことを記憶すと章を分つこと五、曰く理論と實行、聖典と教訓、譬喻と註釋、教理と所感、佛教と家庭、又節を分つこと二十、其主なるもの實行の難、先見の性易きに在り、而るに諸を難きに求む、人々其親心親とし、其長を長として天下平かなりと、余は往時常に家庭に在りて父兄より此の如き孔孟の格言を習ひ、其習慣は遂に第二の天性となりたるものか、(中略)此れ余の五十年間を指導せし圓誠のーにして、父兄が以て著闇の料とせられし、一章なり國家に對するも宗教に対するも、子弟が其父兄に對する愛慕の誠心を發揮するに在りとは父兄の急願なりしことを記憶すと章を分つこと五、曰く理論と實行、聖典と教訓、譬喻と註釋、教理と所感、佛教と家庭、又節を分つこと二十、其主なるもの實行の難、先見の性易きに在り、而るに諸を難きに求む、人々其親心親とし、其長を長として天下平かなりと、余は往時常に家庭に在りて父兄より此の如き孔孟の格言を習ひ、其習慣は遂に第二の天性となりたるものか、(中略)此れ余の五十年間を指導せし圓誠のーにして、父兄が以て著闇の料とせられし、一章なり國家に對するも宗教に対するも、子弟が其父兄に對する愛慕の誠心を發揮するに在りとは父兄の急願なりしことを記憶すと章を分つこと五、曰く理論と實行、

に成つたのだから、それで私達は此通り何時も唄つて居なければ成らない」

二人は之を耳にして多年の宿疑一時に冰解し喜び限りなく學究先生は即曰く

「何ても神の此世界を造つたのは自分を拜せよと云ふ爲すのだ」

と。然るに少時ありて學究先生は不審を起して曰く

「あの島は『拜』と云つたのか——それ共『愛』と云つたのでは無らうか?」

之より一人は『拜』を主張し、他は『愛』なりと争ひ激しき論議あり、結局專心研究

し結果各自署名をして意見を公表す。學究先生は論じて曰く

「神ノコノ世ナ造レルハ萬民チシテ已ナ愛セシメンカ爲ナリ」

又學究先生曰く

「神ノ此世ナ造レルハ萬民チシテ已ナ拜セシメンカ爲ナリ」と。

之より社會は二個の異說を得て迷ふ事甚し。即て兩人相次て死す。此後に至り更

に一人の學者顯ばれ名けて究々先生といふ。此人先の二人の說を研究する事多年

更に一說を立て曰く

「神ノ此世界ヲ造レルハ萬民チシテ已ナ拜シ且ツ愛セシメンカタメナリ」

と云ひ。洵に滑稽の妙を極め風刺骨に迫るものと言ふ可し。(發行所東京日本橋博

文館定價六十錢)

### 喜創七草

巖谷 小波著

同じく小波山人の作品にして無邪氣なる喜劇七種を集めたり。曰く、やかず鉢二、誕生日、三、貯蓄券、四、化の皮六、臆病娘、五、初の舞踏會、七、子寶、而して山人のはしがきに曰く「茶番以外に、にはか已外に上品なる喜劇の欠乏は久しく我が文壇に訴へられたる處なり、此書の如きは聊か其補の一部として手近なる處より抄譯を試みたるもの云々」と、以て山人の意の存する處を知るに足るべし。山人は謙遜して抄譯と自稱せりと雖も吾人は篇中殆んど翻譯の痕跡を認むる能はず、寧ろ到る處に小波獨特の輕妙無邪氣なる滑稽趣味を感受するを得、創作と呼ぶも何等の不可なるを見ず。吾人は唯々山人の多能多才なるを讃嘆するのみなし。今本書を以て前記「笑の國」と比較するに、殆んど甲たり難く乙たりがたく其一を購ふ人は必ず他をも忘る可らざる姉妹書なり。蓋し我文壇は山人を有するは猶一家の老祖母も有するに似たらんか、之に仍て多くの恩蔭を得る者何ぞ彼の童男童女ののみに限らん、活動場裡に奔走する慈父愛兄皆君と雖も一度び山人の微笑に接しては終日の疲勞一時消散するの思ひあれる。殊に本書に挿入せる數葉の滑稽齒は能く各編の妙所を活現して、見る者をして覺ねず頗る解かしむるものあり。(發行所東京京橋金尾文調堂定價金八拾錢)

## 時報

### 福島縣傳道

本年は福島縣下に因縁圓熟して夏季は若松市同朋諸氏の招に應じて數日間共に大悲を仰きたてまつりしが、爾後求道會益盛にしていつも團樂して濃かに御徳を讚嘆し、各自告白をなし、歎異抄を味ひ奉り、時の遷るを知らず、感泣して如來の加威力を感謝し、不思議の佛智を讚仰したまへる由佛天冥祐共に尊み奉る又告白欄にも見ゆる如く、二本松福島桑折地方有志諸氏の招きにより九月十六日夜東京を出立して夜將に曉ならんとする頃、本宮町を過ぐ、時に渡邊安治君倉皇として列車中に入り迎えたまふ二本松に着すれば恰も朝靄遠近の丘陵を置めて清新の氣息はん方なし、顯法寺方に着し、午後は同町他の寺にて講話を行ひ、夜は七島方にて講話を爲す、同家に泊して一家團樂坐るに佛恩の極なきを感謝し奉る、特に朝に夕に勸行の聲清らかに佛陀と共に起臥したまへる家風與ゆかし、

十七日安達原の黒塚の跡を訪ふ、晝夜顯法寺に於て講話を爲し、同地の教育者有力者にして道を求めたまへる人ありき翌十八日福島にゆき吾は縣會議事堂に於て講話會を開けり、聽者頗る眞面目にして道を求めたまへり、詳かに時代の要求思想界の潮流より信仰を以てして満足せらるべきを述べ、同地に中學教授角田柳作氏并渡邊氏親友又教誨師瓜生津氏等の

人々求道會を組織したまふ、即ち會後同會信仰談話會を開き、了りて海野田村氏并前記の人々予か爲に晚餐會を催したまふ、温情深く身に入るを覺ふ、其夜田村氏宅にて講話を爲す、純粹に歎異抄の精髓を述ぶ學生等にしてかくの如く耳を傾けられたる稀に見る所也、又在京の際學舍に來聽したまひ女學校教授赤間米子氏も來訪したまひ十九日柔折に移り、同日晝夜とも各宗協同の會に於て佛教の要領、實驗の信仰を説く翌二十日午前傳來寺に於て信仰談話會を開きて懇話せり而して同日晝夜とて同寺に於て講話すべき筈なりしが東京に急用を生せしため、午後より黄昏に至るまで絶對他力の信仰を説き飽まで佛天の御計のきはまりなさを喜び夜角田德立氏の懇切なるを見送を受け、本會にて又も渡邊君の送りを受け、夜漁車にて稱名念佛しつゝ二十一日曉東京に着す、吾人は五日間福島縣下に法縁を結はしたまひし佛恩を感謝し奉る。

### 熊本市傳道

十月七日夜出立して郷里江洲に歸寧し、昨年戰死せし從弟東溪大歎師の一週忌を營み又報恩講を執行し、且つ近傍の有志及び信徒の間に轉道しつゝありしが、熊本市第五高等學校内佛教青年會の招聘により二十日江洲を出立し、直行にて西下し、二十一日瀬戸内海の風景を眺め、宮島附近の絶景を賞しつゝ下關海峽を渡り九州鐵道に移り黄昏植木驛に着するや野口諦聽君を初めとして砂徹照、赤松智城、猪股佛讓、安藤祐専等の青年會及び福山正登條方典等の地方有志諸氏の熱心なる迎を受け歎抄の間に上熊本に着しければ今川夫人を初めと

して婦人會代表者并に青年會員の多數は特に熱心に盡力したまひし教師戸張瀧三郎氏と共に雨を冒して歡迎したまひ其眞摯朴訥の風彩頗る慕はしく感ぜしめる乃ち車を連ねて白水館に迎へらる、回顧せは是今より七年前三月に予か將に西航せんとせしとき九州巡回の際投宿せしの家、實に懷舊の情に堪へざるものあり、乃ち學生及び有志諸氏と團樂して相語り、坐るに佛恩の無窮を嘆じて感謝に堪へざるものあり

翌二十二日午前諸氏に伴はれて水前寺に遊ぶ恰も祭禮に當り馬追の行列あり蓋し朝鮮に捷てる古の儀式なりといふ午後延壽寺に於て第一回講演宗教の真髓と題して實驗の信仰を述ぶ其夜青年會員信仰談話會を開く、吾人は從來未見の信友にして來訪せらるゝ人々頗る多く福岡よりは西原恒衛有田廣兩氏來訪したまひ四日間滞在して熱心に聽講したまひたり、又熊本附近に於ける道友日夜相繼きて共に法縁を喜びし人頗る多かりき

二十三日より已後三日間毎朝特に菊池兄弟兩師の希望により延壽寺に於て法話を聞き從來の信者の爲に信仰を説く、午後縣會議事堂に於て第二回講演時代思潮と信仰と題して、現時の思想界の問題を解釋するは一に信仰にある事を述べて詳かに自己が自覺の實驗を述べ、夜大谷派說教場に於て熊本佛教婦人會の爲に二席の講話を爲す、同會は戰時中軍人家族援護の爲に自覺しき活動を爲したる有力なる團體也而して同會の創立者西行德量氏は久しく東京に來り求道學舍に來聽せられしが恰も歸郷せられしは深き因縁といふべし本日は特別開會の趣旨を辨ぜらるゝ、加之青年會及婦人會の講師たる野田師





# 仰信と生人

號季秋道求

著觀常角近

錢壹稅郵 錢拾貳價定

天地秋に入りて空澄み渡り野に収穫の黄ばめ  
るあり、されば人の心の上にも秋來りて、氣  
澄み渡り、信の體得に忙はし、ばに秋は求道  
の好時節と謂ふべし。朝に霜が履みて清會を  
開けば森嚴の氣室に満ち、夕に團樂して信仰  
を語れば感謝の情意に溢る。況や燈火漸く親  
むべく、讀書亦一段の趣味を加ふるの時なる  
に於てをや。是れ求道秋季號か發兌して同朋  
諸氏の机邊に捧ぐる所以也。

- |     |         |
|-----|---------|
| 第一章 | 人生問題と信仰 |
| 第二章 | 悲觀思想と信仰 |
| 第三章 | 倫理力行と信仰 |
| 第四章 | 犯罪心理と信仰 |
| 第五章 | 社會主義と信仰 |
| 第六章 | 國家秩序と信仰 |
| 第七章 | 世界宇宙と信仰 |